論　説

経済更生運動と満蒙開拓移民

―静岡県地域の事例―

山　本　義　彦

はじめに
1　経済更生運動の展開過程
2　静岡県の更生運動と満蒙開拓
3　榛原郡中川根町の開拓事例
4　満州開拓村の現場
5　静岡県の満蒙開拓青少年義勇軍事例
6　周智郡森町のある青少年義勇軍体験者の場合（その１）
7　周智郡森町のある青少年義勇軍体験者の場合（その２）
むすび

寄贈
10.11.11
静岡大学附属図書館

はじめに

筆者は、かつての論稿[*1]において、中川根町に事例を求めて、当時の、昭和恐慌期以降の農業救済事業としても位置づけられていた経済更生運動と「満蒙開拓」の関連性を把握する内容を発表したことがある。その際の観点は、当時の農政が持っていた矛盾の解明、つまり生産活性を喪失

*1　山本義彦「経済更生運動と『満州』移民―昭和恐慌期静岡県中川根地域の一断面」『静岡県史研究』第２号、1986年を参照。

させられた地域としての榛原郡中川根村という静岡県大井川中流域右岸の一山村と、この川を挟んで左岸の志太郡徳山村という、より農村的基盤を有する二つの地域を具体例として、前者が「分村」移民の形で、満蒙開拓への道を辿ったのに対して、後者は脆弱とはいえ、農業的基盤をなお止めていたことから、農業振興に希望を持って、満蒙開拓への道を取らなかったことの二つの村の位置を考えようとしたことである。

そこでの端的な結論を述べておくと、前者中川根村では生活基盤を林業労働に従事することにのみ依存していたために、第一次世界大戦期の物価暴騰にもあおられた林材価格の上昇が、他地域と同様に経済活動を向上させた反面、大戦後の長期の停滞と昭和恐慌による激しい物価下落と経営不振の下で、ついには林業労働に従事する条件を欠き、再生の見込みを喪失して、ここに関東軍及び拓務省当局の施策に乗って、満蒙開拓に起死回生を期待するという結果を迎えたのであった。他方、徳山村は、一定の農業経済活動が存在し、米作の外に若干の農作物を生産することができたこと、村長がそれを背景に経済活性化を村落内部の発展に期待することを優先的に判断していたし、これに照応する産業組合等の発展をも歴史的前提としていたことから、満蒙開拓への道を取らずに、大戦の終結にまで至ったということであった。

この二つの事例を考察した筆者は、当時の農政官僚の中にも積極的な満蒙開拓への方針を支持する集団が必ずしも存在していたのではなく、むしろ徳山村長のように、農村を救済するには農民がその地に踏みとどまっていればこそ可能であると認識したことも、知ることができた。たしかに関東軍の執拗な開拓への誘導にもかかわらず、一定の抵抗感が農政官僚にあったことは知られているが、1920年代の石黒忠篤農政の流れを汲む、小平権一と竹山祐太郎らはそうした農政家として上げられるかも知れない。筆者がかつて竹山の生前にインタビューを行った際にも、また彼の自伝的著作*2にも、彼がいかに農村振興意識を持って農政に従事していたかはある程度知られる。とは言え、農政官僚のそうした主観的立場は、従前に貫徹できるほど当時の状況は甘いものではなかった。

すなわち、関東軍による補完部隊として開拓団村、満蒙開拓青少年義勇軍を組織しようとした執拗な運動と、そして何よりも激化する農業不振とは容易に農村内での自己完結的な経済振興政策を実現できるような状況ではなかったからである。上に述べた中川根の林業地帯は、いわば養蚕業にのみ依存していた信州農村地帯と比定されるべきかも知れない。一定の地域社会が、近代的工業社会の荒波の下で、強靱な経済基盤を維持するためには、モノカルチャ的産業構成ではとうてい支えきれないというのも、当然と言えば当然のことながら、この研究から学んだ筆者の認

*2　竹山祐太郎『自立』竹山祐太郎自伝刊行委員会、1976年。インタビューは1983年9月。

識である*3。

小稿では、国家レベルの経済更生運動の展開過程を改めて確認しつつ、それを具体的に静岡県中川根地域の外にも事例を求め、この運動の一つの結末としての満蒙開拓運動の実態を説明することに焦点を当てたいと考える。その際、筆者年来の願望でもあった満蒙開拓団の村を歩いた経験もまた、認識を深める手段として活用したい。小稿は前稿*4と同様に、静岡県史通史編*5に執筆した内容を基礎とし、かつ若干のヒアリング調査等を補足している。また小稿では、この国家的政策の詳細の記述はできるだけ簡略にして、静岡県の事例を中心として展開した。というのは筆者に限ってみても、既掲論文で原資料を基礎として、詳論しておいたし、また先行研究業績でも知られるからである（ヒアリングには当時の用語もあえて変更せず採録した）*6。

小稿では、県史の記述に新たに二つのインタビュー資料を加えて、論を展開した。というのは、満蒙開拓団の歴史像を描くに際しては、当時の体験者の側から見ての認識をも加味しつつ、行うことが、不可欠であると考えたことであり、またそれは今後の研究を深める上での、参考資料としての意義をも持つと考えたからにほかならない。以上、併せて検討の場に付すこととした。

1　経済更生運動の展開過程

経済更生運動の施策体系　1929年（昭和4）10月、アメリカに始まった世界大恐慌は、文字どおり先進帝国主義諸国とその従属国・植民地をも巻き込む事件となった。当時の国際的なマルクス主義経済学者イェ・ヴァルガは、この恐慌ぼっ発に先立って、第1次世界大戦後のドイツ戦争賠償問題に端を発した世界経済情勢が、1920年代後半のアメリカにおける過剰生産と資金の遍在による国際金融連鎖の攪乱とによって、一大恐慌の発生の予測を打ち出し、事態がそのように推移したことによって、マルクス主義への知識人の傾倒を呼び起こした*7。世界史的にもこの恐慌を

*3　この論点は、実は農業問題に止まらない意義を持つことは容易に理解されよう。というのは、知られるように、1960年代高度成長期に重化学工業化の道をひた走り、特定産業分野に特化した「企業城下町」が長期の低迷に陥っている現実、また1980年代のテクノポリス政策の下で、常に同様の質を持った「テクノポリス」計画を策定した諸地域の経済がいかなる状況に陥っているかを見ることで自明であろう。これらの論点を考える上で、鶴見和子・川田侃『内発的発展論』東京大学出版会、1989年、保母武彦『内発的発展と日本の農村』岩波書店、1996年を参照。テクノポリス政策に関する基本的視点は山本義彦編『近代日本経済史』ミネルヴァ書房、1992年、第11章、山本義彦「浜松テクノポリス構想と地域社会」上原信博編『先端技術産業と地域開発』御茶の水書房、1992年を参照。

*4　山本義彦「第2次世界大戦期地域経済の変貌―静岡県地域の事例―」『静岡大学経済研究』第2巻第2号、1997年を参照。

*5　『静岡県史通史編近現代二』近刊予定（脱稿後、97年12月に刊行された）。

*6　山本義彦「経済更生運動と『満州』移民―昭和恐慌期静岡県中川根地域の一断面―」『静岡県史研究』第2号、1986年、参照。武田勉・楠本雅弘『経済更生運動史資料集』Ⅶ、柏書房、1986年。

*7　E．ヴァルガ『世界経済恐慌史』慶応書房、1934年参照。外にヴァルガ『大恐慌とその経済的結果』経済批判会訳、叢文閣、1935年。日本の戦後の作品であるが、個別論文集の性格の強い共同論文集として東京大学社会科学研究所編『ファシズム期の国家と社会1 昭和恐慌』東京大学出版会、1978年を挙げておきたい。

転機として、第 2 次世界大戦後に本格化する現代資本主義化が開始されたことは通説化してきている*8。すなわち第 1 次世界大戦後の世界は、なおも大戦前のイギリスを頂点とした国際金本位制の再建を課題としつづけていたものの、この恐慌が、金本位制の最終的離脱と金の裏付けを欠いた「管理通貨」制度の国際的展開の序曲となった。

わが国の場合、第 1 次大戦後の金本位制への復帰の課題を実現しないうちに、インフレ・マインドの経済施策が展開され、それ自体が大正デモクラシーの支えともなったのであるが、同時に産業界の合理化や財政引き締めの課題は繰り延べられたのであった*9。浜口雄幸民政党内閣の下での「公私経済緊縮運動」や「教化総動員」はそうした状況への合理化再編という課題を達成するための国民統合政策であった。ではどうして合理化が必要であったのか。それは国際連盟常任理事国として、「政治大国」の一翼となったわが国にとって、当時依然として金本位制に戻ることこそが大国としての使命であると考えられていたからである。そのためには緊縮による貿易収支の赤字改善が必要だというのであった。また一つには 1924 年の帝国経済会議での審議内容*10が示しているように、経済的に強固な基盤を固めるためには重化学工業化の道も必要であり、その前提として経済界の整理が必至であったということである。

さて大恐慌はわが国においては、工業における不振をカルテル等による再編成を通じ、かつ恐慌期の生糸輸出の困難化による対米貿易赤字の出現を機とする為替下落を利用した輸出強行によって切り抜けつつ、他方で零細規模の農家経営と植民地にしわ寄せしていった。そしてまた農村では生糸恐慌と 20 年代以来の生産力拡大による農産物過剰のために経営危機が進行し、「全般的落層」とその後の学者が指摘するような、農村の全階層にわたる経営危機と負債の累積が発生した。ここに「経済更生運動」が提起された根拠がある。そもそも兵庫県農会の山崎延吉の提唱による農村不況に対処する自力更生運動の方策を、小平権一ら農林省農政局官僚が全国的施策として展開したものがこれであった*11。

「市町村会議に於ける経済更生運動に関する県の指示事項」(1932年 9 月) は、こうした農林省

*8 この指摘の早いものは、大内力『日本経済論』下、東京大学出版会、1961 年を挙げておくことができよう。大内氏は宇野弘蔵の経済学説に従って、金本位制では基本的に通貨価値が安定していて、等価交換原則が貫徹するが、不換通貨システムとなった第一次世界大戦後状況は、絶えざるマイルドインフレーションの進行による賃金価値の他の諸物価との傾向的な不等価関係に入り、組織化の進展とともに賃金労働者はマイルドな賃金上昇を志向する (下方硬直性) ことを指摘した。この考え方は John Maynard Keynes, A Tract on Monetary Reform, Macmillan, London, 1923, とも共有する意識であろう。

*9 山本義彦『戦間期日本資本主義と経済政策—金解禁問題をめぐる国家と経済—』柏書房、1989 年。

*10 山本義彦編『第一次世界大戦後経済社会政策資料集』全七巻、柏書房、1987 年、特に同書別冊「解題」を参照されたい。また同趣旨は、山本義彦「日本帝国主義の危機状況」歴史学研究会・日本史研究会編『講座日本歴史』第 9 巻、1985 年、前掲拙著『戦間期日本資本主義と経済政策』をも参照。

*11 井上晴丸『日本資本主義と農業及び農政』中央公論社、1955 年、暉峻衆三『日本農業問題の展開過程』上、下、東京大学出版会、1970 年、1984 年、西田美昭『近代日本農民運動史研究』東京大学出版会、1997 年、中村政則『近代日本地主制史研究』東京大学出版会、1979 年など。

による施策が県レベルでどのように具体化されていったかを示している*12。そこでは農村振興土木事業の施行、農業倉庫建設奨励、共同作業場設置奨励、牧野改良と駒育成設備奨励、農村及び中小商工業元利支払資金融通、林道開設及び荒廃地復旧事業、製炭設備奨励金交付、桑園整理改植、乾繭共同保管、耕地拡張改良事業助成等に関して指示がなされている。その際事業主体は市町村であり、この他耕地整理組合を通じる個人や組合事業として展開する。

「農山漁村経済更生計画に関する件通牒」(1933年6月15日)は、経済更生運動の柱となった、農山漁村に対して経済計画の策定とその提出を要請した文書であり、これに基づいて各地で計画が立案され、その内容を県がチェックした上で、農林省の指定村として確定するものである。そこには「経済更生委員会準則」が盛り込まれ、町村の委員会組織化の任務と構成、役割が規定されて、これを雛形にして各町村が委員会を組織することになった。組織内容はよく知られていることなので、簡略に言えば、委員会は町村吏員、町村会議員、学校教職員、農林漁業経験者、町村農会、漁業組合、産業組合、養蚕実行組合等産業団体関係者、自治会等教化団体関係者を網羅し、会長は町村長であった。民力涵養運動と同様な全村ぐるみの組織形態である。計画のために町村ごとの調査が行われ、かつ各戸単位の経済計画を策定させるべく農家家計簿の作成も期待され、家計簿の配布が行われた。むろん家計簿を作成できる農家は中上層に限られるし、げんに全国的な配布状況を示す農林省内部資料を筆者が調べたところ、全農家戸数の約3分の1に止まっていて、しかもその全農家が付けたかどうかは知ることはできない。ただし一定の農家に簿記を付けさせたことから、むろん「自主性」「計画性」をある程度自覚させたという役割を改めて認識しておくべきであり、まさにそこにこの経済更生運動が持つ、一定の積極性を捉えることもできよう。この点は筆者のすでに掲げた論稿で論じたところである。静岡県内各地の資料でもこうした計画は多く発見されている。都市部の現在の静岡市近郊についても千代田、安東、麻機、久能や大谷の各村のような農村地帯の計画が「静岡市農山漁村経済更生計画」として収録されている。しかしそもそも財政的にも厳しい状況の下での計画であるので、農林省としても精々のところ指定村の計画策定のための技術員の活動に要する旅費支給程度のものにとどまった。このほか農林省、内務省ともに「時局匡救事業」とか「救農土木事業」の名のもとに、暗渠排水工事や耕地整理事業に取り組む町村に対し補助金を交付した。この経費は1932年後半(同年8月、「救農議会」開催)から34年までに、約20億円に上ったが、これは当時の国家の1年間の歳出規模が50億

*12 これは、静岡県知事の市町村長を集めた会議で、指示された事項であって、当時の地方制度では、1920年代半ばの郡制廃止までは「郡市長会議」で指示されていた。そして郡長が町村長を集めて郡町村長会議によってその内容が示達された。その後、郡町村会という緩やかな協議体が形成された。しかしこの協議体は一定の「自主性」をもって電灯料値下げ運動や義務教育費の国庫助成増額運動等に力を発揮していた。『静岡県史資料編近現代5』を参照されたい。また静岡県森町『森町史』通史編2(近現代)、1998年でもこの点の執筆を行ったことがある。

円程度であったので、それなりの大きさをもってはいたが、町村の末端、つまり農民たちの手元に届く給与としては、彼らの負債に対比してまさに「焼け石に水」であった*13。

こうしてこの運動は内務省系列による国民更生運動＝つまりは自助努力のための精神運動と結合していった。「二宮尊徳翁生誕百五十年記念講演会に関する件通牒」(1936年6月27日)は、この運動が報徳思想の普及、教化運動と関係付けられていることを示している。この講習への参加が予定されているのは道府県市町村吏員であり、報徳精神をもって、当時の不況をくぐり抜ける力をつけようというのである。当時、農林省農政局に勤務していた戸倉莞爾(袋井市愛野)の1982年の筆者に対する回想とその際に示された資料によれば、農林省では農村の振興のために、二宮尊徳の仕法を研究し(農政当局内部の研究用として謄写版刷りの資料がある*14)、全国的にもそれを広めるために、教育宣伝活動として、農民道場や講座、掛川の大日本報徳社での合宿などを行っていたのである。中泉農学校の細田多次郎校長の薫陶を得、宇都宮高等農林学校を経た農林省技師戸倉は、戦後に袋井町に戻り、町長、初代の袋井市長などを歴任した。また農政局の若手官僚として経済更生指定村の中堅農家探しに走り回った竹山祐太郎（戦後静岡県知事）も中泉農学校から東京帝国大学農科予科に進み、農林省に職を得た。なお、周智郡森町中川の本多フミ家所蔵資料*15に、静岡県属（学務部社会課）や堀之内職業紹介所長、地方事務官静岡県農村計画委員会専門委員、静岡県海外協会嘱託等を歴任した本多明善の文書資料がある。これには当時の経済更生運動、満蒙開拓移民政策遂行のための関連資料と本多が移民者や拓務訓練生等に行った挨拶文の綴、分村計画関連資料が含まれている。

経済更生特別指定村と満蒙開拓武装移民　経済更生運動は既述のように、国家の財政支援としても不十分なものとなり、それだけに深刻化する農山漁村の窮状を克服することにはならなかった。そこで農林省は経済更生運動のレベルを引き上げるべく、更生運動のための施設整備費についても、地元の財政負担および地元民の無償奉仕にも依拠しつつ一定の財政支援を図ることとし、その対象としては、発展への意欲をもつ農山漁村として絞り込んだ地域に対して補助金を交付した。それが農村の自前の負担と比べてどの程度のものであったかについては、具体的に前掲山本論文*16が算定しているので参照されたい。これら村落を経済更生特別指定村とした。「農山漁村経

*13　この問題指摘の早い著作としては、猪俣津南雄『踏査報告　窮乏下の農村』中央公論社、1932年（その後岩波文庫所収）であろう。これに対する批判的見地の著作としては長幸男『昭和恐慌』岩波新書、1973年を挙げておくことができよう。
*14　謄写刷りは「尊徳仕法の研究」と題されていた。
*15　筆者は森町史編さんの過程で、これらの資料を参看することができた。
*16　前掲山本義彦「経済更生運動と『満州』移民」を参照。

済更生特別助成規程」(1936年7月23日)は、その静岡県の規定を示しているが、基本的には農林省の指示によるものである。それは毎年交付する「農山漁村経済更生計画実行の助成」費用のための規程である。計画実行のため、町村が借入した預金部資金の利子の二分の一以内へ補助として設定されている。また「経済更生特別助成村協議会における県の指示事項」(1940年7月19日)は、こうした指定村の競争を図ることで、経済活性化を達成しようという狙いをもっている。いわく「自力更生精神及び農業報国精神の発揚」、「戦時下における経済更生の趣旨は、村経済の恒久的更生のみならず、国策たる重要農林水産物の増産を図るため、農山漁村の諸組織を整備し諸団体の統制強化並びに活動の促進、ひいては農山漁家の自覚により経済更生計画の実施を期する」とうたっている。それらとともに「満州分村計画及び満州農業開拓民送出」が述べられている。「農山漁村の経済更生を徹底せしめ村の恒久的安定を図るには、その根本策として村内資源と人口の均衡を調整することきわめて肝要なり。その不均衡打開策としての満州分村計画の実施、満州農業開拓民の送出は経済更生上」重要と考え、「一方吾が民族の大陸発展及び満州開拓の促進のため非常時局下重要国策にして」その達成を図るべきこと、と打ち出して、経済更生特別助成計画の推進と「満州開拓移民」政策とが一体のものとして位置づけられたのである。

経済更生運動が、当初、財政的には町村技術員や農会技術員の農家経営への技術指導のための旅費等の支援という消極的内容と、他面での産業組合運動等による民間の経済力に依拠した共同倉庫や選果場の設置等の計画策定による活性化を図るに止まっていたのに対して、経済更生特別助成は、施設設置等へのより積極的な財政支援を含みつつ、活性化にとって障害となると意識された「過剰農家」の「満州移民」への誘いを行おうとしたところに、大きな相違がある。

表―1　昭和11年度から16年度までの経済更生運動と分村状況（実数、%）

	更生計画樹立町村	特別助成村	分　村
全　　国	7,969	1,595(20.0)	135(1.7)
静　岡　県	321	38(11.8)	5(1.6)
静　／　全	(4.0)	(2.4)	(3.7)
参考長野県	363	48(13.2)	19(5.2)
長　／　全	(4.6)	(3.0)	(14.1)

町村数は農林省「農山漁村経済更生特別助成町村名一覧」昭和17年、武田勉・楠本雅弘編「農山漁村経済更生運動史資料集成」Ⅶ（昭和60年、柏書房）による。

表によれば、全国一の開拓移民を送出した長野県は別格として、静岡県の更生計画樹立村に対する特別助成村の比率は相対的に高く、分村比率はほぼ全国水準にあった。

2　静岡県の更生運動と満蒙開拓

満蒙開拓武装移民と青少年義勇軍　この政策には陸軍の影響の大きかった拓務省による満蒙開拓武装移民の組織化を図るべく、窮状にある農山漁村の一定の世帯をまとめて「分村移民」方式で、いわゆる「過剰農家」の「満州」への投入を実現し、もって関東軍の支配力の不足を補完させる目的の下、武装農民として特に関東軍の手薄な地帯への「日本人村」建設を行った。その目標は、20 年間で 100 万戸 500 万人という途方もない大規模なものであった。そればかりではない。この目標設定には一面で、「満州」総人口 5000 万人と予測し、その 1 割を日本人が占めることによって、「安定支配」が可能との判断に立つものである。また他方では、それは全国的な農家総戸数のうちで、過剰戸数として割り出した数値であり、特別指定村についても、村ごとに過剰戸数を割り出させて（全国で 30 パーセントと算定されている）、「満州」への送出を実施したのである。こうした算定がいわばガイドラインとして各町村に提示され、在地の町村長、役場吏員、町村農会、農業技術員はその人集めにかり出されることになる。小学校を卒業して間もない、少年を含む青少年義勇軍を送り出したのである[*17]。

こうした移民送出に当たっては、移民地の視察を行い、「王道楽土」をキャンペーンした。静岡県では特別助成村 38 のうち分村移民を行ったのは、富士郡富丘（富士宮市）、白糸（富士宮市）、芝富（芝川町）、浜名郡知波田（湖西市）、駿東郡愛鷹（沼津市）の 5 か村であった。しかしその他にも駿東郡原里村（御殿場市）、榛原郡中川根村（榛原郡中川根町）等で分村移民が行われたし、静岡県全体の移民送り出し人員は全国 10 位のうちに入る。少年義勇軍送出人員は、全国 7 位である[*18]。

「満州農業移民募集に関する件通知」は、1936 年 12 月 24 日、静岡県学務部長から市町村に発せられた通知である。「満州農業移民の奨励は町村、部落の経済更生上根本的にして且つ甚大なる関係之有候に……若し此際講演会、懇談会等御開催の計画之有候はば、御希望に依りて適当なる講師を派遣」するとうたっていて、当時は相当に満州農業移民への応募もあったというのである。そして郡レベルで青少年義勇軍の訓練施設が登場した。そのひとつが「賀茂郡拓務訓練所」であった。町村レベルでも同様な組織化が追求されている。大陸開拓後援会が設置されたのはそうした旗振り人をいかに組織するかという問題であった。開拓民と青少年義勇隊を送り出す際にはこの

*17　前掲武田・楠本編『経済更生運動史資料集成』の各巻を参照のこと。
*18　『長野県満州開拓誌』上、下、郷土出版社、1981 年の解説による。

組織が「出征将士に準ずる待遇」を図り、餞別等を行うとした。村ぐるみ町ぐるみの組織として、会長は町村長が担った。また理事には村会議員や小学校長、青年団長等があたり、特に高等小学校二年担当教員が含まれて、青少年義勇軍募集に当たることが示されていた。全国的には農業移民のために日本国民高等学校長の加藤完治（元山形県立農業講習所所長）は茨城県内原に訓練所を設置し、「満州」の厳しい気候条件に堪えられるような肉体的訓練と精神訓練を行った。また政府も富士山や八ヶ岳にも訓練道場を設置した。静岡県では県立引佐農学校（多田実校長）に38年、「静岡県開拓訓練所」として設置された。多田校長が県立小笠農学校校長に転任すると、同校に40年、静岡県女子短期訓練所を設置、「満州」向けの花嫁養成を行った。「満州国」竜江省鎮東県竜山（ロンシャン）（現中国吉林省白城市）の福田開拓団を背景として設立された「竜山開拓女塾*19」は、代表的な存在であった。さらに校長は県に働き掛けて1943年、静岡県女子拓殖訓練所を設置しようとしたが、志太農学校（現・県立藤枝西高等学校）への転任で果たせぬまま、終戦を迎えている。多田の後を受けて小笠農学校校長となった角替（つのがえ）九一郎は同訓練所の所長を兼任した。静岡県送出の「満州」開拓民人員等の一覧は表―2のとおりである。

1942年の「満州地方農業移民地視察報告書『静岡村概況』」と題する、詳細な「満州」の農業移民による開拓村の実情を視察した報告がある*20。「静岡村」の立地はハルビン（哈爾濱）からはるか北東の「満州」東北隅の旧ソ満国境に近く、松花江と黒竜江の合流地点に近接した僻遠の地である（当時の地名では三江省湯原県鶴立崗）。これは当時の榛原郡中川根村の板谷壮吉前助役等が視察訪問した記録であり、その目的は、中川根村民をいわば安心して「満州」に移民していけることを示すところにあり、こうした視察報告と並んで、政府による奨励目的のための映写フィルムの巡回上映会が行われたりした。前掲表―1に示すように、開拓団、青少年義勇軍の送り出しは全国比でそれぞれ3.8パーセント、約2パーセントであり、表―1の更生計画の樹立町村、特別助成村の全国比率とも照応しているといってよい。

この開拓団の始まりは1932年10月の試験移民団約500名が佳木斯（チャムス）に入植したのを皮切りとしているが、この団はその後「弥栄開拓団」と称している。35年10月、満州拓殖公社が設立され、開拓民への金融、移住地の買収分譲、開拓地建設と経営にあっせん助成することとされた。36年には広田弘毅内閣の下で、満州移民を十大国策の一つとして位置づけることとされ、先にも述べたように、20カ年100万戸、500万人送出方針が策定された。38年度を初年度として第1期5カ年計画により、10万戸移民が始まった。翌年「満州開拓政策基本要綱」によって、移民は「開拓

*19　これに関しては、杉山春『満州女塾』新潮社、1996年参照。
*20　『静岡県史資料編近現代5』所収。

民」とされ、37年7月には関東軍の指導性により「青年農民訓練所創設要綱」が登場し、同年9月には「青年義勇軍先遣隊」が到着した。11月になると政府決定により青年移民送出方針が登場し、38年から青少年義勇軍の送出が本格化した。静岡県の第1回送出は1936年3月東安省鶏寧県哈達河(ハタホ)開拓団に8世帯36名が入植し、1945年6月海城(ハイチャン)清水郷の入植まで単独開拓団10個(開拓女塾1を含む)、3,640名、混成開拓団等42個団948名(義勇隊から移行した混成団36団を含む)を送出し、人員では全国第12位という。青年義勇隊は38年5月6日内原訓練所を終えて派遣された83名を皮切りに44年5月の勃利訓練所神田中隊送出までの8個中隊1,933名を送出した(この総人員6,521名中帰還者は4,854名、74.4%、死亡は1,631名、25.0%、未帰還者36名、0.6%)(開拓団の展開状況については、図―1参照)。

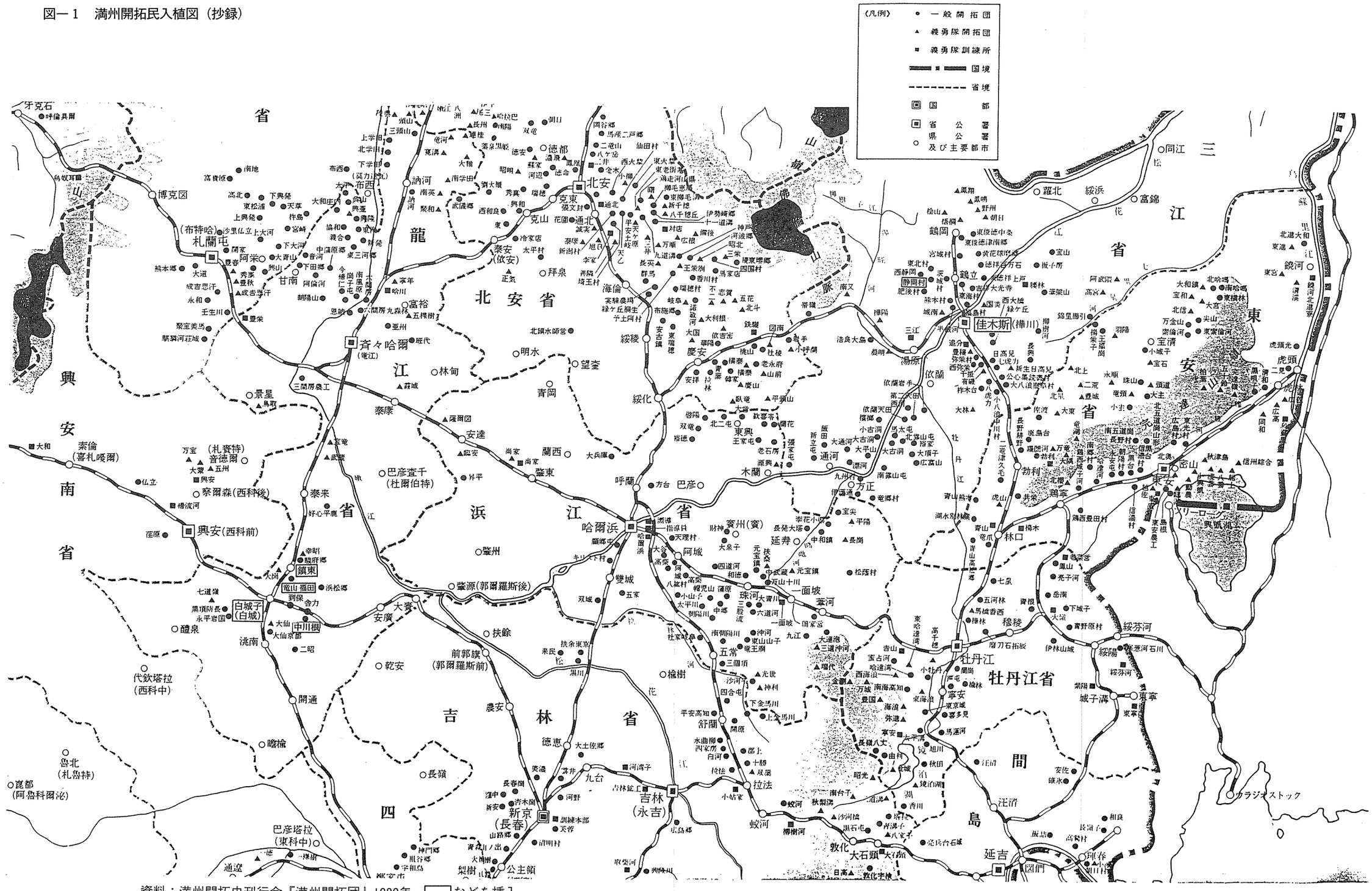
3　榛原郡中川根町の開拓事例

中川根開拓団の組織化　中川根の分村移民の場合、林業労働者としての生活を主とした零細な土地持ち農民であるのがほとんどであった人々にとっては、第1次世界大戦期の物価暴騰に影響されて林材価格もまた大戦前に比べて高騰したことを背景として、林業労賃も比較的上昇していたはずであったが、大戦後の景気の後退と長期の低迷は、林材価格の大戦前への低落に引きづられて、林業労賃もまた一挙に低下した。そうした約10年にも及ぶ地域住民の生活苦にいっそうの窮境をもたらしたのは、昭和恐慌であった。山林地主として目立つ存在がなかったこの地方では、材木商人に従属する山林労務者として就労する外に道はなかったのである。このように人々には脱出口のない苦難がさらに追い打ちをかけたのであった*21。こうして村政担当者たちに用意された国家からの「救済」策は、零落を余儀なくされた多数の村民に「満蒙開拓団」を組織することであった。恐慌対策としての「経済更生計画」は、ある程度の農業基盤を有している場合には一定の回復政策として展開させることもできたかも知れないが、この村のようにほとんどの住民が土地や山林を持たず、せいぜいのところ、島田の材木商人に雇用されて山林伐採に従事するほかなかったところでは、発展させるべき生業がなかったのである。だからこそ「過剰人口」として処理する筋道にはこうした強権的な「満蒙開拓団」が用意されたのであった。

145戸693名がこうして故郷を後にしたのは、1942年4月のことであり、彼らは村助役板谷壮吉を団長に中国東北旧満州竜江省白城市外の鎮東県套保(現・到保)村周家地区1万3,000ヘク

*21　山本義彦前掲「経済更生運動と『満州』移民」による。

図―1　満州開拓民入植図（抄録）



資料：満州開拓史刊行会『満州開拓団』1980年、□などを挿入

タールに分村川根郷として農耕に携わったのである。この隊は4月10日ふるさとを後にして、12日敦賀港を出帆し、14日清津に到着し、17日新京（長春）、18日白城子を経て、套保に到着、大豆、こうりゃん、馬鈴薯、蔬菜類の作付けをし、営農方針としては農業、牧畜、植林の三者兼営として、子どもたちは鎮東県竜山開拓団在満国民学校に就学した。少年義勇軍にも29名が応募したのである。こうした送出は容易ではなかった。目標の世帯数を確保することは到底困難であった。43年1月23日の村文書では、「第二回本隊六〇戸送出に付ては……一七名合格し、……計画に充たざる四三戸の送出は第三回本隊として二月二十日迄に募集」することとした。これはたんに厳正な選考による目標数の大量不足といったことではなく、実際の応募数の不足の結果であったから、あらためて不足分の補充のため新たに募集し直しを行ったことが示されている。そして第3回は12戸に止まってしまった。送出経費は全て補助金によって運営された。こうして例えば、43年2月3日から5日まで、「開拓団員送出啓発講習会」が中川根村長、同興郷会長連名で開催され、分村計画の模範長野県読書（よみかき）村*22からの報告、女子の興亜教育に関して、開拓団送出運動に邁進していた加藤弘造（県議を歴任）の妻加藤つな、また義勇隊婆さんによる「女子の大陸進出」の意義等が語られた。また開拓民配偶者斡旋指導員が活躍した。そして「開拓団編成推進員」を動員して、送出に努めた。300戸送出が目標とされた。こうして送り出されていった家の財産である土地や山林、家屋の管理は個人間の処理に委ねずに、興郷会に一任するように努めさせ、同会が農会、森林組合、産業組合と協力して管理、処分することとした。しかし45年8月には、日本の敗北とともに分村は解体し、長春を経て翌46年9月には郷土に帰還した。その間の犠牲者は181名に上ったのである（犠牲者は実に25%に達する）。最終的には川根開拓団は他の6か町村にも呼び掛けて第11次集団開拓団として300戸、617人の多数に上る送出となった。この彼らが落ち着いた套保は、後にも見る福田開拓団の落ち着いた所と隣接する静岡県の他の開拓団とも近接した位置にあり、長春から北西へ350キロメートルほどの白城駅の二つ手前の駅周辺という奥地で、モンゴル砂漠地帯にも近い。砂地のいわば荒れ地がほとんどの位置であるが、川根郷地域は今日もとうもろこし、こうりゃんなどの穀物収穫地帯である。筆者は套保村には入らずその周辺地区を歩いたが、この地を遠望するだけですぐ分かったことは、上のように稔りのある地帯ということであった。ただし中川根開拓団の村は周家囲子という現地の地名に基づいて、周家中川根開拓団と表現したが、これは相当大規模な周家の所有していた土地を示していたと伝えられるこ

*22 高橋泰隆『昭和戦前期の農村と満州移民』吉川弘文館、1997年は、読書村を事例として分析している。同村は満蒙移民の典型的な事例として知られていて（『南木曽町誌』通史編1982年、「近代第9章第3節満州移民」も参照）、当時も模範的な村として全国に紹介されていたし、戦後、もう一つの典型的模範村であった泰阜村の場合に関して、ハンディな小林弘二『満州移民の村—信州泰阜村の昭和史』筑摩書房、1977年を挙げておきたい。

とから、この地も他の場合と同様に、優良地であったことをうかがわせる*23。

中川根村の現地視察と応援隊　先遣隊入植と同時に村の書記中野幸逸、壮年団員山田信一の 15 日間に及ぶ現地分村の視察と村会議員 100 名、村吏員 2 名が長野県読書村、富士見村、大日向村、そして満州移住協会、拓務省を訪問させること、ほかにも多くのそうした視察等を繰り返した。前掲『拓魂』の記録によっても、じつにそうした作業は 1944 年 9 月までに 11 回に及んでいる。国の規定「満州建設勤労奉仕隊開拓応援作業隊派遣要項」に基づいて、1942 年 9 月 5 日から 10 月 10 日にかけて、各部落会で 1 名、合計 15 名の規模の応援作業隊派遣も行われ、秋収穫作業と村建設に加わった。この人々の宿舎には「満人家屋の買収」、「未住家屋一〇数戸」があてられた。最初の応援隊代表者大田隆次の「実績報告書」によって、その日程を見ると、9 月 5 日に中川根を出発して、8 日には白城子に到着、12 日から 10 月 4 日には新京を視察、6 日大連、旅順視察となっていて、短い期日ではあるが、「満州国」の発展ぶりを感じさせるために首都や日露戦跡見学が織り込まれていて、恐らく開拓の意義あるところを感じさせたのであろう。戦跡めぐりでは日露戦争に参加した老人の説明が印象的であった*24。実際、参加者の回想記でもそれが印象深く述べられている。こうして「作業隊員中にも三、四名渡満の決意をなしたるものあり」、「明年度は子女を派遣する要あり」と報告されている。こうして 43、44 年度では応援隊規模も多少増加し、しかも女性の人数も極めて増加している。勤労奉仕隊も内原訓練所の分所で 8 日程度の訓練が前提である。皇国精神と農民道、満支一般情勢、満州事情、開拓事情、衛生、教練、日本体操、農業実習等である。また参加者の 1 人であった松下麟一の回想ではこの教育、なかでも加藤所長(完治？)の「満州建設は侵略でも、革命でもない、新しい五族協和の国づくり」といったことに感銘を受けたという。中川根村の開拓団の「開拓綱領」には「身を満州建国の聖業に捧げ神明に誓って天皇陛下の大御心に副い奉らんことを期す」「我等は身を以って一徳一身民族協和の理想を実践し、道義世界建設の礎石たらん事を期す」と記されていて、『あゝ拓魂』では「極めて政治的、国家主義的色彩が濃厚に漂っている」が、「一面には戦中の農民の精神の一端を示したものでもあった」

*23　この調査旅行は、1996 年 6 月 4 日から 19 日まで実施した。案内者は福田開拓団の開拓女塾に属し、現地の国民学校教師となった寺田ふさ子さんであった。この人は父寺田政雄氏を現地で喪った。調査期日は同氏の亡くなった日に合わせて行った。寺田氏の逃避行の顛末は寺田ふさ子『無告の大地』潮出版社、1996 年に詳しい。また同書は潮ノンフィクション賞を受賞した。福田開拓団の記録としては、矢崎秀一編『満州開拓竜山　春光』1967 年、また中川根開拓団に関しては、中川根拓友会『拓魂』1974 年が貴重な記録として残されている。これは当時の中野幸逸助役の所蔵資料をはじめ中川根町役場に残されている詳細かつ充分と言ってよい豊富な資料の成果である。

*24　日露戦争遺跡は今日も残されていて、筆者は中国側が外国人に初めて参観を許可した 1994 年の旅行でつぶさに見ることができた。この時の記録は山本義彦「中国東北、日本による侵略の爪跡を訪ねて」『静岡県近代史研究』第 21 号、1995 年を参照されたい。

と比較的に冷静に記されている。また同書では警備関係の記録があり、その中で、次のような指摘が見られる。いわく「当地区の治安状況は極めて良好であった。入植地は大部分が既墾地の買収であって、原住民の移転等によるトラブルの発生はありがちなことであったが、それからも団建設を脅かすような事態は一度もおきなかった」と。つまりは開拓団の土地は、現地の人々によってすでに開墾され耕作、利用されていたというところに開拓団村政策の問題がひそんでもいたのである。銃器30挺、弾薬3,000発などの数字がここでは示されているが、後で述べる逃避行にさいしての、現地の人々とのトラブルにこうした武器弾薬が、開拓団の武装勢力としての意味を与え、現地の人々が怯えることからくる襲撃の一因をなしたといってもよいかも知れない*25。

警備指導員が元軍曹とか、団自体の訓練に鎮東の陸軍部隊に入隊しての宿泊訓練を実施したり、関東軍が南方に動員され、空白となっていたこともあり、「開拓団員はその穴うめとして期待されたのであろう」と記述されていることも、比較的正確に思える。また団の児童への教育施設は、関東軍司令官の管下にある関東局在満教務部の所管とされた各省学校組合が設置されて、教員身分上、各学校は外務省在外指定校となった。中川根の場合、当初は竜山福田開拓団の学校に児童を寄宿させて教育が行われ、のちに川根在満国民学校の発足となった。

更生計画実現の困難性と開拓団村　中川根開拓団の場合、1933年の経済更生計画自身が実現性の弱いものでしかなく、将来見通しを村が作られるような実際的経済的基盤としてなかったことが、一目散に満蒙開拓へと人々を動員することになったのである。以下、中川根拓友会前掲書*26によって、動向を見ておこう。というのはこの榛原郡中川根村（現・榛原郡中川根町）の資料は極めてよく保存されていて、しかも同書もそれを大いに活用している貴重な記録となっているからである。当時の中川根村議会に提出された「満州開拓民に関する資料」（1942年2月現在）によると、1戸当たり人口5.88人、総戸数1,025戸のうちで、農業、商工業が戸数にして285戸で、うち商工業132戸のなかで108戸は農業との兼業、その他が740戸でそれは全て農業を兼業としている。この「その他」は基本的に林業労働に携わっていると考えられる。そして農業といっても5反以下が476戸、5反から1町が200戸、1町から3町は30戸、3町以上は1戸という零細

*25 満蒙開拓団問題で意外と忘却されてきたこと（特に体験者であればあるほどそうであるが）は、まず武装して逃避行を行うことの現地住民に与える動揺とおそれ、さらにそもそも関東軍の制圧下で行われた土地「買収」行為への現地住民の怨念や不信感を醸成してきたであろう状況という点への配慮であろう。こうした論点を含めて、中国社会科学院近代史研究所『日本侵華七十年史』中国社会科学出版社、1992年を逸することはできない。この標準的な中国の概説書には「東北経済の全面統制」の項で、一「交通運輸の統一的経営」、二「採鉱、冶金業開発」、三「金融機構の改組」と並んで四「移民、土地及び農業略奪」が挙げられて、日本の原資料にも依拠しつつ、満蒙開拓が強奪的色彩を濃厚にしていることを鮮明にしている（同、587頁以下）。

*26 前掲、『拓魂』。

規模であった。だから農家1戸当たり耕作面積は田0.3反、畑3.7反で合わせて4反程度であった。

これではとうてい更生できる条件がなかったというほかないであろう。村助役板谷壮吉は1941年7月末から8月にかけて満州奉仕隊に参加し、その見聞を村人たちに広めることになった。それは彼が自覚していたように、また上にも述べてきた通り、貧しいこの村を何とか更生させたいとの願いからのものであった。開拓青少年義勇軍にはすでにこの村から1938年以来、毎年参加者がいたのである。むろん県軍事厚生課拓務係や竜山開拓団の矢崎秀一団長（磐田郡福田村）らからの勧誘もあった。

矢崎のその後の回想*27によれば、彼の担った竜山地区よりも中川根開拓団の套保（現・到保）・周家白昭地区が裕福であったとしている。竜山地区は廃屋も多く、非常に貧乏村に考えられていた、と。酪農を主体として村づくりが可能なアルカリ質の砂地で草原湿地帯でもあったという。筆者が現地に見る限り、たしかにその判断は正しいように思われた。この集団移民の組織化のために村は「中川根村興郷会」を組織した。実際、応援隊で作業にも加わった田端修の回想でも、こうりゃん、ポーミー（包米）、豆類、野菜類がすばらしく生産できたことが述べられている。

板谷の帰村後4ヶ月ほどたった42年1月下旬にはこの「興郷会」の組織化と分村計画とが村会で検討されている。決定は2月14日の村会であった。2月4日、県庁での打ち合わせを通じて、分村計画遂行を決定し、11日以降、翼賛壮年団協議会でも分村の検討が行われ、映画会、矢崎団長の講演会等が各学校単位ごとに実施されていった。27日、先遣隊24名が内地の訓練所に入所し、3月9日基幹先遣隊4名が渡満し、4月200日先遣隊24家族が出発している。2月15日決定の開拓団編成計画書でもこの村が貧しく、1人当たり4合の米を1日に要するとして、年間8,700石余を必要とするのに、この村での生産量はわずかに474石で1か月の需用量にも達していないことが強調されている。

重要な産物である製茶についても、戦時下の労働力不足が制約となっている。こうして全農家戸数1.25戸から300戸を満州開拓団に組織するという遠大な計画となった。つまりこの村戸数の3分の1であり、家族人員としては1,450名、42年の11月の人口7,356名のほぼ2割であった。送出人員の財産は村全体で有効な配分を行い、負債は自作農創設維持資金や負債整理組合法による整理を村の責任で遂行するというのである。実際には1946年時点での数字で川根開拓団総員は617名と記録されているので、目標の43%ということになる。計画は計画であって、現実には目標通りの人員が集まらず、現地からは矢の催促がしばしば行われていた。もっとも順調に事態が

*27 矢崎秀一「竜山開拓史実録」矢崎編『春光　満州開拓竜山』1977年。本書は寺田ふさ子氏の寄贈をえた。

推移したわけではない。団長となった人が応召を余儀なくされたり、幹部の事前訓練に余裕がなく、現地に近いハルビンでの訓練に任されたりといったたぐいのことがそれである。

応召と中川根開拓団の組織崩壊　この套保地区は当時、白城子まで列車で約45分、新京(長春)まで12時間を要した、東経123度7分、北緯45度31分のちょうど日本列島の北海道のあたりということになろう。もっとも年間降雨量は200ミリ、冬季はマイナス33度といった乾燥地帯で寒冷地。農繁期は夏季に集中し、しかも高緯度のために、日照時間も長く、ともすれば睡眠時間が少なくなりがちというほど、生産性も高い、とリポートされている。土地の広さは約1万3,000ヘクタール。入植300戸として、1戸あたり25ヘクタールの配分が期待され、残余は共同経営に当てるといった内容である。しかも河川に沿った地域であったことから稲作の水田を維持できた。これはうえに示した母村の現実とは打って代わって水田を持ちたいと願ってきた山村の人々に期待感を持たせることになったであろう。この点では、福田開拓団のような専ら牧草地と畑作といった状況とは異なっている。だから開拓団長板谷壮吉の1942年6月の中川根村にあてた「開拓地状況報告」にも、「竜江省の穀倉と云われる所で、アルカリ地帯とは云うものの、農業状態は一番良い所と思われます。羊草(やんそう)(当時の開拓団での呼称、中国では野草(イエツォウ)と呼ばれる羊の牧草となるササの葉)地帯は兎に角、畑地の草類はなかなか勢い良く伸びます」と記したのであろう。入植当初は、現地の農法を学ぶために、現地人を雇い入れて、学んだ。初年度は団経営で作業を取り組んでいる。また大西林平の報告によると、現地に入植した前後には反日的姿勢を感じることはなかったものの、1945年1月には洮児(トール)河畔の河原に「東洋小鬼」という落書きが見られ、そこに現地住民の本音を見るべきであったろうと『あゝ拓魂』に記載されている。しかしこのように馬、豚、鶏の飼養、大豆も麦も、米もそして大根、南瓜もと生産に意欲を持ちうるかに見えた開拓地であっても、目標の戸数を実現することは容易ではなかった。冬にはウイズ(アシ)の刈り取りが重要であった。洮児河で採取するのがこの地の生活であった。これは炊事用と採暖用として活用されたからである。

1943年度の報告を紹介しよう。いわく、「当初の部落設置計画では、後棉二五戸、前棉五戸、一棵樹25戸、好門昭二〇戸、風水山一五戸、計九〇戸の計画であったが、期待に反して入植者の数がへったため、五部落編成を中止し新たに一棵樹、東風水山を加えて四部落とし、前棉は農耕者を減らして逐次本部部落の形を整えていくことになった」としている。そればかりではない。白城子(現・白城市)には電気が敷かれていたが、この地には期待できず、夜間はランプ生活であり、母村でもすでに1924年には電灯が灯っていたから、若い世代には抵抗があったろう。食事は

雑穀、つまりこうりゃん、粟、キビ、包米、小麦等の混炊であった。副食の肉類は主として自給豚肉、自給味噌類など。保健衛生面では開拓団村には当初、医療施設はなく医師もいなかったが、白城子の満鉄病院に依存した。1943年にようやく診療所が開設された。

1944年末ともなれば、応召者が開拓団でも相次いだ。ついに44年5月初旬には板谷壮吉団長、また翌年5月末には中野幸逸団長代理まで応召したのである。つまり最後には40才以下の男子は皆応召したといってよいという。こうしていよいよ「労働力の不足が身にしみると共に不安感が加わった」。45年7月の兵員動員によって、本部は2人の指導員と2、3の団員「のみとなり指導体制は崩れてしまった」。じっさい、『あゝ拓魂』に記載されている「最後の部落編成」によって、計算すると、135世帯のうち、応召者数は53世帯、40%に及んでいる。これは具体的には16世帯のうち10世帯、一棵樹の部落のように、もはや生産組織としての姿をとどめることさえ困難に陥ったのである。

満州武装移民とソ連の参戦　1945年8月9日、旧ソ連はトルーマン米大統領らとの、ヤルタ会談での協議により、日ソ中立条約を破棄し、「満州」に、軍を出動し、侵攻に及んだ。ところが、当時、すでに敗色の決定的であった沖縄戦にまで「関東軍」の精鋭部隊を派遣していたために、とうてい抗する軍事力は「満州」に存在していなかった*28。スターリンらソ連指導部には、アメリカとともに占領後の日本を東西分割して米ソを軸として支配するという目論見さえあった。またアメリカ側としても何としても日本占領後の主導権を確保したいところであって、ソ連の参戦を促す一方で、6日には「新型爆弾」(原子爆弾)の投下を広島に実行し、さらには9日、長崎にもそれを繰り返したのである。「満州」に侵攻に及んだソ連軍は破竹の勢いで進軍し、ほとんど武装力を持ち得ない在満日本人の混乱と逃避行での無残な多数の悲劇をもたらした。まさにわずかとはいえ「武装」した開拓団村の日本人の逃避行は、中国人に恐怖を与える一方、彼らの故地の田畑を奪われてきたことへの憎しみも手伝って、一部には逃避日本人への復讐行動に出る者も少なくなかった。他方、ソ連軍の進撃に怯えた日本人は集団自決や、足手まといとなった幼児、病人の多数を置き去りにするなどの悲劇を生んだ。もっとも何物にも代えがたいいのちのために、わが子を中国人に譲ったり、女性がソ連軍に犠牲となったり、あるいは戦時国際法にも反するソ連による抑留と強制労働のためいのちを落とすなど、様々の事件が発生した。

*28 ボリス・スラヴィンスキー『考証日ソ中立条約』岩波書店、1996年、アーサー・コンテ『ヤルタ会談』サイマル出版会、1996年参照。

4　満州開拓村の現場

「満州」移民の現場ーその過去と現在　筆者は1996年6月上・中旬に、上に述べたように福田開拓団の村々が現在どのような姿をしているかをとらえるために、開拓団経験者の案内で探訪した。そこから感じたことの一端を以下に述べることで、開拓団の現場がどのようなものであったかを考えてみたい。

第2次世界大戦が終結して、半世紀。昭和恐慌がこの福田町にも大きな爪跡を残し、特に恐慌から戦争への道で、多くの人々が満蒙開拓団に送り出されていった。筆者は1996年6月、福田開拓団の一員として、渡航経験のある寺田ふさ子（磐田市城之崎在住、在満国民学校教師を勤め、父政雄氏が犠牲者となった）と、当時、寺田の教え子であった鈴木実夫妻（福田町福田在住）に同行して、福田開拓団の暮らした中国吉林省竜山、白城市などを、訪ねた。現在鎮南の中国全土に種羊を供給する模範放牧場である吉林省種羊場となっている、開拓団村は、昔の痕跡をほとんどとどめているわけではなかった*29。この地で朝早く、市場を見て歩いたが、いかにも放牧を日常とする人々の生活を反映しての食肉や、衣料品が売られていたのには、この地がモンゴルに近いことをあらためて印象づけられたほどであった。

そもそも福田の開拓団はほとんど農民ではなかった。戦争下、別珍・コールテンの本場として発展した歴史ある位置を占めていた福田である。しかし国は綿花の輸入を規制し、少しでもその外貨資金を重要物資調達に充てようとして、織物業家に、原糸の割り当てを行わず、業種転換を指導し、その一環として、満蒙開拓団に組織した。むろん仲買業者も不要となったから、これらの人たちからも、動員されていった。実際、寺田ふさ子の父・寺田政雄は織物商人であった。

さて地域の概況は次の通りである。開拓団の地域は今も畑作と放牧の実りを感じさせる豊かなところであった。ここを離れると、全くのアルカリ質の土で、荒れ地としか表現できない土地柄である。そのすぐ東には中川根開拓団の土地がひろがっていた。みるからにこの地を除けばやはり荒れ地という状況であった。

『静岡県史資料編近現代5』で東北部「満州」の牡丹江と松花江が合流し、旧ソ満国境の極めて近くにあった三江省佳木斯（ぢゃむす）に近い「静岡村」が県民を開拓団に吸い寄せる絶好の優良な地として、幻灯機を使うなどして当時も紹介されていた資料を掲載している。この地はすぐ近くに麻山事件で知られる開拓団の逃避行で全員相互に殺し合いをして、自滅した場所とも近い。つまり開

*29　調査の際に、受け取った牧場の概要説明「吉林省鎮南種羊場簡介」1996年4月5日による。

拓団村の多くが現地の優良地域を占拠していたということである。確かに開拓で汗水垂らして頑張った多くの人々の経験談もあるが、同時に当時の資料でも日本の開拓政策が現地の優良地の確保を行っていたことも事実であった。

また開拓地の確保に関しては、中川根町の高木悦朗が回想するように*30、満州拓殖公社が現地の人々から、安価に土地を買い上げ、場合によれば、接収などの強制を伴って展開された。生活つづり方運動で静岡警察に検挙された高木は教員を辞めさせられた後、当時満州拓殖公社に勤務していた。しかも土地買収を始めとして、それらは軍事力を背景にしたものであり、現地の人々にとってはいわば容赦なく取り上げられたと認識されても不思議ではない。拓務省が既耕地を主として開拓団村としたことを記録しているのはそうしたあたりのことを指している。また日常生活では当時「満人」(現実には圧倒的に少数派の満州族ではなく、漢族)と呼んだ人々と同居したり、苦力として使用して、決して非友好的ではなかったわけではないと、回想される場合が多いのは、背景に軍事力、通常では開拓団そのものが武力を保有する集団であって見れば、外見的には中国の人々といかにも「友好」的に接触していたと感じたとしても、中国人からはやむを得ないところであったろう。

ところで白城(バイチャン)駅(当時は白城子と呼称)は、長春から鉄道で約300キロの西北に位置して、旧ソ満国境にもそれ程遠くない、およそ20キロも走れば内モンゴルに連なる土地で、いかにも砂漠化している地帯という観を示していた。だから白城の駅に降り立ったとき、町が全体として「満州」特有の柳条の白い毛が舞い、白っぽい砂におおわれているかのように感じた。家並みもそうした色合いであった。白城の駅は当時も現在も長春(チャンチュン)と同駅を結ぶ鉄道路線と、旧ソ満国境近くのチチハル(斉々哈爾)と四平(スーピン)を結ぶ路線(平斉線)の交叉する交通の要衝である。白城から北に上るチチハルに向かう平斉線の次の駅鎮東(当時は竜山(ロンシャン)信号所であった)が開拓団の土地である。ここまでの道のりは現在ならば、日本から大連に飛行機で2時間半ほど飛び、大連から長春まで約8時間、長春から西北に鉄道線の長白線(当時の日本支配下では長春の名称である「新京」をとって京白線といった)を乗り継いで4時間ほどの計14、5時間から20時間で到着できる。しかし当時は山口県下関を経由して船で朝鮮北部の「満州」との国境近くの清津(チョンチン)に渡り、さらに鉄道線で安東を経て長春経由ということなので、1週間余りの行程であった。また旧ソ連との国境にも近いところでもあった。そのためにごたぶんにもれず、日本の敗北前後にはソ連軍の攻撃を受け、決死の逃避行が行われた。それは1945年8月18日から25日までに及び、手元の資料では小銃50丁、手榴弾15個、手刀を男女の大人が1丁ずつ携帯した、といういで立ちであった。468名

*30 高木悦朗氏の1994年8月の証言による。

のうち78柱は非業の死を迎えねばならなかった（犠牲率約17%）。隣接した開拓団とはいえ、套保（到保）近辺に入植していた川根開拓団の場合は、新京（長春）白城間の鉄道線に近かったこともあり、200メートルの洮児河鉄橋を渡って舎力までの20キロほどの行進を行って、とくに襲撃を受けることなく、鉄道線にたどり着いて新京に向かうことができた。団が列車に乗車したのは8月14日、新京着は17日であった。46年8月7日瀋陽に到着している。22日には日本に向けて瀋陽を出ている。この点、福田の場合は、平斉線沿いであったために、逃避行の悲劇を生むことになったのである。

全国に先駆けた静岡の青少年義勇軍送出　満蒙開拓政策が目標とした100万戸500万人移住はとうてい達成される状況ではなかった。根本的には生まれ育った郷土を後にして、しかも北辺の守りを兼ねたいわば屯田兵政策であることが、そして見ず知らずの満州に飛び出すことの難しさがあった。そこでその不足を穴埋めするかのように取り組まれたのが、16才から19才前後の小学校を終えた青少年を満州に動員することであった。加藤完治の下で茨城県友部と、内原訓練所を基幹として3ヶ月程度の訓練を経て、派遣されていったわけである。ここでの日輪兵舎と呼ばれる建物や独特の体操、開墾訓練等は青少年を満州に旅立つ決意を固めさせた。「君たちは軍服こそ着ないが、国軍としての精神を持つ国士である誇りを持って移民の大業を達成されんことを祈る」といった言葉を後にして、かれらは「新天地」に旅立ったのである。ソ連の町の光が見えるソ満国境沿いの土地に動員され、これは関東軍さえ守備する場所ではなかった。先輩が村に帰ってきて、青少年に誇らしげに現地の様子を伝え、勧誘が行われたり、小学校教員が積極的にクラスごとに、参加呼びかけを図ってきたおかげであろう。1942年11月8日、中川根村は村民に対して、青少年義勇軍募集を呼び掛けた。すでに39年に2名、41年1名、42年4月4名の送出を行ってきたが、分村の「中堅人物」として期待されるべき人材として、毎年20名の送出を図りたいとするものであった。16才以上19才までの国民学校初等科終了、父兄の承諾を得た者を対象としていた。内地訓練は茨城県の内原で3か月間、母村出発の壮行式は学校で開催し、郡教育会から餞別として15円、役場からは訓練服代として10円を贈与し、訓練服は衣料切符なしで斡旋する、戦闘帽は県から贈呈するなどの「特典」を与えた。現地訓練所では46年春まで、その後に分村に配置といった内容であるが、じっさい、第1回選考では5名を応募させ5名合格（実際の参加は4名）としたという記述が43年1月の第2回選考文書に出てくるから、そもそも送出はそれ程容易ではなかったと推察される。しかもこの第2回募集の文書では陸軍谷萩報道官の「死一歩手前迄行かざれば勝利を得ることが出来ない」という悲壮感に満ちた言葉さえ引用されていることから

明らかなように、また「本年度高等科卒業児童および二〇才未満の青少年」と対象を微妙に1年引き上げ、しかも「一〇町歩の土地」、「義勇軍は幼年学校と農学校を一緒にせる如き内容を有する」、「物資優先配給」と今さらのように、その有利さを宣伝しての内容を持っているところに、深刻な募集難をかんじさせてあまりある。こうして第2回では6名であり、結果として本年合格者は10名と目標の半分であった(2月8日の文書による)。43年2月の第3次募集に当たっても、20名の目標確保のために各部落会1名以上の応募を図らせるようとの指示が出されている。こうして故郷を後にした義勇軍は39年2名、41年3名、42年4名、43年10名、44年10名という実績に見るように全体としても目標の半分前後に止まった(全国目標としても38年から42年で9万4,800名、実績は6万4,000名、68%)。さて義勇軍に対応する大陸花嫁の政策として展開された「開拓女塾」への送出では、川根の場合、竜山女塾に属していて、8名が関係している。そのうち渡満時の出身で中川根が3名、本川根が2名、島田市が2名、東京が1名であった。義勇軍以上に人員確保が困難をきわめてことはこの数字に明らかであろう。年齢的には16才から23才前後であった。

5　静岡県の満蒙開拓青少年義勇軍事例

義勇軍植松中隊の苦難　『あゝ清渓―ある開拓少年義勇軍の記録』(同編集委員会、1968年)によって、静岡県の少年義勇軍の送出が全国的に最初であったことを含めて、少し述べておこう。元教員の植松貞治を中隊長とする一隊が構成員297人で寧安(ニーアン)訓練所で1940年6月25日に訓練を開始して、東安省饒河に入植したのが43年5月であった。訓練終了後、入植地名をとって「清渓義勇隊開拓団」と称した。このように静岡県で単独に組織された義勇軍郷土中隊は9個、2,000人に達した。清渓はウスリー江を挟んでソ連と接している土地である。このほかに静岡県から送出された義勇軍は284人であり、九中隊で敗戦時の犠牲者数は推計で400から500人程度とされる。この規模は全国のおよそ3%程度に達する。植松中隊は第一小隊が富士郡単独で、61人、第二小隊が沼津から駿東、田方、賀茂郡等の伊豆で組織され、58人、第三は清水市を中心とした59人、第四は中遠地方の64人、第五は浜松を中心として65人の合計307人からなっていた。

彼らは牡丹江省の東京城近辺の寧安訓練所での訓練を受けたが、『記録』では率直に関東軍の特別演習にあって、除草期に軍の協力員として大量の人員が引き裂かれ、農作業が困難に陥ったこと、同時に歩哨のほかに軍事のための手伝いとして城子溝での苦しい協力を求められたこと、訓練所では月給3円が現金ではなく、日用品等を購入した残額を個人の貯金に積み立てられる形式

が取られたとし（1人平均毎月1円の購入）、人によっては購入物資を「満人部落」に持ってゆき、酒、タバコ、月餅に代えたりした。居住した建物の状況は質が悪く、粗末な状況であって、訓練所側の目標の1割程度の内容しか達成できていない始末であったこと、日常生活ではトラブルに類する喧嘩が絶えず、小隊長を困らせることがしばしばあった。

開拓団での作業も生産性が高い場所であり、それは既墾地300町歩、未墾地900町歩、その他牧草地などという事実を反映しているだろう。開拓2年目に入ると日本軍の命令で「有無を言わせず強制的に」、「国境の治安と国防の必要から」、「内国移民」の形で移動させられたり、関東軍よりも20キロも前線に配置されていることへの不安が絶えずあったことが述べられている。また、45年8月8日を過ぎると、周辺には関東軍が一切存在せず、その中でソ連軍の攻撃を受けねばならなかったこと、こうして饒河の日本人500は不幸にして全滅させられたことなどが、多数の個人の回想的文章で綴られている。それだけに個性的な表現を通してリアリティを感じさせる表現を読みとることができる。また上にあげた開拓団員の給与の方法があたかも朝鮮人強制連行による強制労働と極めて似ていて、その場合も「給与」は支払われたのではなく、郵便貯金「規約貯金」とされ最後まで受け取ることはできず、戦後も未払いのままという証言がある*31。

静岡県が戦後発表した全国の送出開拓団、義勇軍、報国農場、開拓女塾の団数は1150、戸数10万1,734、人員24万1,428人とされるが、少年義勇軍に関するその後の補正調査では10万人を超していると見られるので、合計では30万人余という。静岡県の送出状況は、開拓団数は10、人員4,453人、義勇軍は県単独と混成を入れて約3,000人、こうして開拓団では全国12位、義勇軍では全国6位と推定されている。この推定でも分かるとおり、青少年義勇軍の全国に先駆けた送出にも知られるように、開拓団の送出に比して、義勇軍の位置は高いようである（表―2参照）。

満蒙開拓とは人々にとっていったい何であったのか　以上、静岡県の開拓団送出状況の幾つかを見てきたが、ここでその特徴に関してまとめておこう。第1に中川根に典型的であるが、農村の不況と停滞の中で、その活性化の方途を失い勝ちであった村々にとって、いわばその起死回生策として、この政策が実施されたのであったが、しかしながらそれにもかかわらず、母村の活性化が達成されるといった甘いものではなかった。同時に開拓団側にとっても団の解散を余儀なく

*31 一韓国人成興植（ソンフンシ）の回想によれば、かれは軍属として韓国から「満州」に連行され、働いた「賃金」は「愛国貯金」などの形で貯蓄を強制され、かつ戦後半世紀を経てもついに未払い状態であった（「戦後補償を考える静岡市民公聴会」第3回、1995年12月6日静岡、7日沼津、8日浜松、9日焼津の5会場で開催）。証言のあらましは「戦後補償を考えるⅣアジア諸国民の怒り忘れられていない日本軍の侵略」「Ⅴ」の第4回、第5回（1996、97年）にそれぞれ収録。こうした諸問題の全般的検討としては、西成田豊『在日朝鮮人の「世界」と「帝国」日本』東京大学出版会、1987年を参照されたい。

されたことからして、成果があったとはとうてい言いがたいのである。このような分村移民の形態は、駿東郡原里村（御殿場市）の山村のような所でも起きた事態であった。つまり養蚕業等を中心として営まれていたこの地の生活が、昭和恐慌の嵐の中で、維持困難となって、満州に飛び出したのである*32。第2には福田開拓団に知られるように、もともと別珍、コールテンのような綿織物工業で特化していたところでは、戦時体制化の下で、綿花供給の制限によって綿糸・綿布生産の困難ないし廃業に追い込まれた分野での人々の生き延びる道として余儀なく用意されたのが開拓であったという事実の深刻さである。それは人々のそれまでに達成してきた成果や技術を一切放棄して異分野である農業に取り組む困難が、異郷の地・満州であることから一層倍加も三倍加もする状況を生んだばかりか、最後にはその満州での活動そのものすら破壊を余儀なくされ、かつ逃避行に示される危険負担を一身に背負い込まされたという事実の重みである。まさにその意味では各地の開拓団誌が訴えているように、たんに日本軍国主義の尖兵とか、侵略者としての加害性の告発だけにされてはかなわないと言う主張の悲痛な叫び、あるいは自分たちは国策に誘われて「五族協和」とか、「王道楽土」を本気で夢見てきたことは、それ自体誤りとは言えないのではないかといった主張に、そのまま肯定し得ないが、それでもこうした政策へのオールタナティヴ（代案）を提起し、あるいは具体化できてこなかったことの民衆の側の深刻な危機の問題でもある。

静岡県海外協会と植民政策　そもそも「満州」移民の奨励が実践される以前には、1920年代の政府の施策の中で北海道移民やブラジル、南洋移民の奨励が行われてきた。それは当時の農村社会の行き詰まりや経済不安のもとで、例えば1924年（大正13）の清浦奎吾内閣の下で設置された帝国経済会議において当時の経済困難を人口問題によるものとして捉えて、国内では北海道移住と海外移民奨励策が提起されていたのである*33。1928年5月の「静岡県海外協会の樺太移住者募集」によれば、樺太（サハリン）庁が直営で植民地を経営しており、そこへの移住者を募集するという。7カ年間無償の1戸当たり5町歩という大きな土地が準備される。開墾が完成してから、無償分与という。農作物は米を除き、麦、馬鈴薯、牧草。移住資格は農業に耐える夫婦者とその家族。移住経費約850円のうち、500円を補助、1家族当たり300円の準備を要請している。牛馬の購入経費の半分は樺太庁の補助あり。こうした細々とした支援を受けて、樺太移住者が渡航するわけであるが、これは「満州」移民とは相当に差のある扱いのように見える。1930年3月の「北

*32　『御殿場市史』第9巻を参照。
*33　山本義彦編前掲『第一次世界大戦後経済社会政策資料集』全七巻参照。

海道自作農移住奨励に関する件通牒」の場合は、形態資金200円以上を要し、現地である根室国内では10戸を1組とする自治的運営が求められた。この移住奨励でも「満州」と同様に、活動写真等の宣伝材料があった。1930年9月の「朝鮮不二農村移住者募集の件通牒」によれば、米どころ、全羅群山港の近隣に存在する不二農村は18県から2,424戸移住、25か村の広大な開墾が果たされているという。そして31年3月にあらためて91戸の営農者を募集したいというわけである。移住者は入村と同時に、水田3町歩、畑及び宅地1反歩、住宅1棟が提供される。移住者は25年間に収益中1反当たり約25円の支払いを行って後に所有権を獲得する。配偶者と家族同伴が義務づけられている。この土地を墳墓の地として居住する覚悟を求めている。500円を携帯して渡航し、

表一2　静岡県送出「満州」開拓民人員一覧表

	総人員	帰還	死亡	未帰還	備　考 移民の状況
単独開拓団	4,527	3,220	1,204	103	6集団 3集合女塾
単独青年義勇隊	1,933	1,581	266	86	8集団
混成開拓団等	135	107	5	23	71集団
総　計	6,595	4,908	1,475	212	

静岡県海外移住協会「静岡県海外移住史」昭和45年により作成
(参考)表による移民戸数61,119戸から1戸当たり人員を2.85人と仮定すれば（東亜経済懇談会調査部編「昭和17年東亜経済要覧」の数値。昭和15年現在21,527戸、61,392人)、全国的には約174,189人が移民した計算になり、静岡県はその約3.8%を占めることになる。なお青少年義勇軍の全国送出人員は（参考表）のように64,138人であるから、静岡県のその比率は3.0%であり、開拓団の比率がやや高い。

(参考) 満蒙開拓青少年義勇軍と日本人

	計画(A)	実績(B)	B/A
昭和13年	30,000人	20,149人	67.2%
昭和14年	30,000	10,818	36.1
昭和15年	12,600	9,156	72.7
昭和16年	12,000	12,411	103.4
昭和17年	10,200	11,604	113.8
合　計	94,800	64,138	67.7

日本人移民の状況(昭和18年12月1日現在)
団数；637　計画戸数；115,181
現在戸数；61,119（53.0%）
(資料：満州移民史研究会『日本帝国主義下の満州移民』昭和51年、龍渓書舎)。

渡航補助金300円は入村後に支払われる。「静岡県海外協会概況」は1934年当時の植民政策の焦点が何であったかがよくわかる。ブラジル渡航を奨励し、そのために植民講習を県立中泉農学校その他に開設し、ポルトガル語、スペイン語の教育が実施され、さらに来るべき「満州移民」を意識して「満州語」の教育も開始している。1940年1月、静岡県海外協会は「英北ボルネオ移住勧誘映画会」を県内各所で開催している。映画、漫画映画等、親しみやすい方法での宣伝につとめている*34。1938年にはすでに静岡県から9家族、70名もの渡航を記録したという。1936年前後に静岡県東部地域の社会大衆党の闘志であった山崎剱二が司政長官として渡航したのも、ボルネオであった*35。1940年ころと推定される「静岡県海外協会によるブラジル移民の呼びかけ」は、

*34　前掲『静岡県史資料編　近現代5』
*35　岩田晶『波瀾の南十字星　山崎剱二の一生』三一書房、1994年を参照。

1908年から開始されたブラジル移民はついにこの当時で、20万人の規模に達した。すべて定着的移住が特色だとされているが、考えてみれば、故国をはるか遠くにして旅立った集団にとって、帰国は当然あり得ようはずもなかったのである。彼らはコーヒー耕地の契約労働者となるが、初年度で、100円ないし300円程度の純益が獲得されるとしている。3，4年もすれば、独立が可能とのことである。「無肥料で農作物が出来、租税など極めて少く農業者には理想郷」と宣伝している。海外協会は静岡県が設立した機関の一つであるが、拓務行政の一環であり、1927年に創設された。静岡県の海外移民は、大正時代までは、ハワイとアメリカ本土が主流であり、その後はアメリカにおける排日移民法等の事情もあり、ブラジルへの移民が多くなり1908年(明治41)から1941年までの通算33年間で3,792人にも上ったという。

6　周智郡森町のある青少年義勇軍体験者の場合（その1）

満蒙開拓青少年義勇軍の体験を持つ現在の森町下問詰身代島（旧天方村下問詰身代島）出身の藤川誠一は1825年(大正14) 8月28日生まれ、天方村立問詰尋常高等小学校を1940年(昭和15年) 3月18日に卒業した。藤川の満蒙開拓青少年義勇軍体験を、1994年6月の聞き取りによって記しておこう。

農家の貧しさと出発　1940年3月30日、小学校を卒業して直ぐに内原訓練所に出発した。そして満州に渡ったのは1940年6月25日頃であった。着いたところは当時の牡丹江省の寧安訓練所であった。東京城という所から歩いて寧安訓練所へいった。距離はあの当時で一日かかったようである。そこまでの経路としては、敦賀から船で清津へ行って、清津から羅津へ、それから汽車に乗って東京城まで。

だいたい、静岡県で編成しただけで300人であった。満蒙開拓青少年義勇軍に行くことを決めたのは、尋常高等小学校高等科二年を卒業する時分であった。次男坊で、家にいてもしようがないということで判断した。満州に行くことになったのは、とにかく宣伝とか、満州へ行け・満州へ行けという時代であった。

まずは、学校の先生が勧めた。次男坊だったので、行ってみようと決めた。

農業を営んでいた藤川家の経営状態は、山間部であったから、面積で5反半くらい。小作も1反半くらいあった。つまり全部で、6反半。家族は、七人、父・母、兄弟は、当時三人、藤川の他は家を出ていた。1人は嫁にいき、もう1人の姉は浜名郡の方へ、女中に行き、兄は農業、妹

は小学生とまだ小学校に入っていな当時、今と違ってなかなか米の収穫はなかった。1反歩で取れてせいぜい五俵（約2石）程度だった。しかも3反は茶畑であった。米を作っていたのはせいぜい2反歩、だから米の収穫は全体で1石半となる。当時の状況ではこのあたりは貧しかった。今とちがって現金収入はなかった。そこで家の者は外に働きに出ていた。

内原訓練所　開拓団に出かける前に、内原訓練所にいたが、ここは訓練と開墾ばかりをしていた。そして加藤完治の訓辞もあった。加藤完治の近くにはめったによれるわけではなかった。加藤が見えると、中隊の行進中でも、すぐに止まって敬礼をした。ここでも毎日がほとんど開墾、訓練で明け暮れた。軍事教練も多少はやったことを覚えている。日課は起床は6時ころ、学科の勉強はやらなかった。開墾、共同炊事、そして就寝は9時ころであった。生活規律は厳しかったと記憶している。

その後、満州に行ったが、小学校を終えて間もない頃で、郷愁を感じると言うこともなかった。というのも、わりあい同じ年かっこうの人達ばっかりだったから。中には、郷愁に悩む人もあったけれども。

青少年義勇軍の生活　敦賀から船で満州に出発した。団員達は協力しあっていて、友達関係もよかった。5小隊というのは、この辺では、周智郡・浜名郡・引佐郡それと浜松市の人たちがまとまって5小隊が編成されていた。周智郡からも7か8人くらい行ったとおもう。満州に着いてからのことで、やっぱり向こうでも、農耕とほとんど軍事教練だった。朝のラッパの合図で6時ころ起床して、主として農耕で植えたものは、大豆・小麦・燕麦だった。野菜では、馬鈴薯・キャベツみたいなものだった。気候や風土で印象に残っているのは、まず、行ってすぐに、まず一番こまったことは、水。やっぱり、水に慣れていないので、アメーバー赤痢に罹ったり。生水を飲んだりすると、そういうことに気をつけた。藤川も、赤痢という名前まではいかなかったが、そういう名前がつく近くまではいった。すぐに直った。藤川は、満州に6年いたから、シベリアにいてもアメーバー赤痢に2回ばかりなったが、自分でどうにか直した。

耕した規模は、ちょっと面積ではわからない。土地には訓練所の家は建ってあった。鉄線で囲ってあった。

開拓地の状態　耕作地は、特には鉄線が張りめぐらしてはなかった、ただあそこは、全部「満人」が耕した跡があった（満人と称されているが、多くは漢民族や朝鮮族）。それを、又、耕しな

おして、色々蒔いた。満州人の部落は土塀を高くして近くに存在していたけれども、この人達との付き合いはほとんどなかった。夏、昼間は、暑いほうは暑いが、夜は、涼しくて、毛布でも着て寝なければならなかった。そして冬は、マイナス30度からマイナス35度、寧安は、マイナス30度くらいに下がった。冬は、全然畑仕事は、出来ないから、地面が凍っていた。少しは柔らかいツンドラだった。冬は主に、軍隊派遣だった。直接軍隊に行って、兵隊と一緒に演習をやった。身分は、青少年義勇隊は義勇隊として、そこの部隊に派遣される。農作業は、だいたい、いっぺんにまとまらないで、5小隊でも色々家畜の世話をしたり炊事当番もある。小隊の規模は59人くらい。その中に小隊長・幹部もいた。秋も10月ころにはとても農作業はできない。春になって氷が溶けて、30センチメートル程度になってから、鍬で土を起こして麦をまく。5月ころじゃなかったかと思う。

つまり約半年は農作業ができず、そのあいだは軍事訓練をしていた。寧安訓練所を3年間で終わって、虎頭から饒河まで40里あった、それを歩いて饒河の静渓開拓団へ入ったのは1943年ころの夏。だいたいこの区間が40里あり、そこを歩いて、向こうまで行った。45年5月までは、少なくとも饒河開拓団にいた。静渓は、静岡県の開拓団である、植松中隊。饒河開拓団の耕作は何をやったか。だいたい同じで、大豆・小麦・米も作った。今の日本の米と同じようなもの。だいたい同じようなものだった。饒河開拓団、この地域も物凄く寒い所で冬は寒い。寒いときでマイナス40度ぐらい。夏は、暑いときは、大変暑いこともある。だいたい牡丹江のあたりも、同じようなものであった。冬は、雪が降るのではなくて、土が凍る。雪も降るには降るけれども。開拓団は、確かに、日頃は、農耕もやった。しかし、武装訓練もやらなければならない。すぐ国境であったから、なおさらである。あの頃の武装訓練は、小銃なんかはあるはあったと思うけれども。開拓団へ入ってからは、それほど軍事教練はやらなかった。だいたい、兵隊から帰ってきた幹部の方々の指導で……。

要するに、一応、日本軍や日本政府の目的は、中国とソビエトとの国境沿いに開拓団を置くことで関東軍が手薄になったところを守らせるという目的がある。だから、満蒙開拓青少年義勇軍といういい方をしたり、武装移民っていう言葉を使っている、軍隊の補い、補充兵であり、だから、そういう役割を果たさせているということである。

森町長藤江誠作の「送辞」　ここに紹介しておきたい満蒙開拓団出発に際してのはなむけの言葉、「送辞」がある。1942年3月3日の森町長藤江誠作のものである。少し長いけれども、状況を知る上で貴重であるので、敢えて掲載する。

送辞

本日周智郡教育会主催ニ依ル満蒙開拓青少年義勇軍ノ壮行式ニ臨ミ、諸君ト共ニ其ノ歓ビヲ分ツノ光栄ヲ得ルハ、私ノ最モ欣ビニ耐ヘナイ処デアリマス。殊ニ今諸君ノ凛然タル姿ニ接シ心強ク且ツ又深ク感激シテヰル次第デアリマス。諸君ノゴ両親モ亦此ノ姿ヲ眺メテハ満蒙ノ野ニ送ラントスルニ、何ノ躊躇逡巡ヲモナサナイデアラウト信ズルノデアリマス。諸君ハ選バレタル戦士トシテ、今出発セラレルノデアリマシテ、其行タルヤ、一細事タル自己保身ノ為デナク、国ノ需メニ応ズルノデアリマス。諸君ノ先輩タル陸海軍将兵ハ、一度国ノ需メニ応ズルヤ、我国独特ノ見敵必殺ノ戦法ヲ、身ヲ以テ実行シ、世界戦史ニ不滅ノ大戦果ヲ挙ゲツツアルノデアリマス。此レ独リ軍人ノミナラズ、不幸、ソ満国境ニ戦雲急ヲ告グルトスレバ、兵站ノ任ハ其レ諸君ノ双肩ニ懸ルノデアリマス。事茲ニ想ヒヲ致ス時、諸君ノ任ヤ、重且大デアリマス。加藤完治先生ハ深掘ノ真理ヲ解カレテ居リマス。諸君ハ能ク此ノ真意ヲ把握シ、諸君ノ身上ニ、夫々思ヒヲ廻ラシ、大和男子トシテ愈々奮励努力セラレムコトヲ希ヒ、併セテ其ノ行ヲ感謝シ、一言御挨拶申上マス

昭和17年3月3日

森町長　藤江誠作

ここに引用したのは、この送辞に示されているとおり、満蒙開拓青少年義勇軍とは「ソ満国境」に戦乱が生ずる場合、兵站任務を帯びることであり、文字どおり後方部隊として機能するところに青少年義勇軍の任務があり、広くは開拓団の任務でもあったことが分るからである。しかし果たして「選バレタル戦士」と持ち上げられても、実際には諸資料に充分に知られているとおり、予定の人員のかき集めに苦労していたのが現実だったはずであり、ここに言うようなエリートとしての「戦士」などという意識がどの程度のものであったかは判然とはしない。むしろ否定的材料に事欠かないであろう。とは言え、兵站としての機能を公言されていることに、この送辞の意義がある。

しかし果たして高等小学校を終えたばかりの子どもたちにどの程度の浸透を見せるものかは即断を許さないであろう。何よりも16歳程度の少年には難しすぎる送辞であり、生活苦のどん底にある彼らにとって、満蒙開拓に旅立つことが、いったい理屈として戦争のための兵站であると吹き込まれたとしても、それほどの意味をなさないはずであったろう。彼らにとってはきょうあすの生活の向上が少しでも実現すること、日ごろ夢見ても実現しそうもない広い耕作地の確保、そこに意義を見いだして出かけたはずだったのである。むろん支配体制とはそのようなあいまい性を前提としつつ、一定の方向性を与えて起動するものであること、従って、民衆一人一人の主観を超えたところに、民衆を引っ張っていくことにこそ、事がらの意味が与えられているのであろう。

開拓団村と既耕地　この、饒河の開拓団は、酷いことをいうようだが、「満人」が作っていたものを没収したっていえば没収したそうだ。家もやっぱり……。

榛原郡中川根村についての筆者の以前の調査による聞き取りではおよそつぎのようなことであった。開拓が必要と思って、現地に行ってみると、なぜかすでに耕されていた土地をあてがわれたというのであった。ここに述べられているとおり、既耕地の耕作で、苦労は思ったほど多くはなかった。

その後、筆者は 94 年の夏にやはり満拓会社に勤めていた人に会った。この人は、もう、85 歳前後の高齢者であったが、戦前に静岡師範を出た学校の先生である(高木悦郎氏)。昭和の初めに綴り方教室運動をしていたことから、綴り方事件といって、警察が捕まえて留置されたことがある。それで、しかたがないので、北海道大学を卒業した兄の紹介があって、満州に行ったらいいだろう、というわけで、満州に行って満拓公社に入ったということであった。日本政府と満州政府とお金を出し合って、設立された満拓会社は、土地の買収、接収、とにかく、土地の巻き上げを仕事としていた。そういう仕事をずうーとやっていた、ということであった。

ところで、寧安訓練所の所長は、陸軍中将だった。二・二六事件の首謀者の一人、こう言うところには追放された人達が配置されていたのであった。二・二六事件で追放された中将、陸軍中将・井上政吉である。このような手法はすでに大杉栄の虐殺に関わった甘粕正彦憲兵大尉の「満州映画社社長」の場合にも知られている。かれは軍事裁判で証拠不十分による免訴となり、その後満州に渡ったのである。現在でも長春電映制作廠に、かれの像が残されている。

対ソ戦への参加　徴兵検査が 1944 年 7 月にあり、そして、45 年 5 月入隊。部隊に入ったのは第 367 部隊といった。守ったといっても、期間はないから、初年兵教育で終わった。3 か月の初年兵教育を受けていたので、それでソ連との開戦になってまた牡丹江へ出た、牡丹江の街のちょっと外れで、1 週間ほどロシア軍と戦闘をやった。曲射砲部隊に属した。曲射砲は、筒が太くつっ立っていて、上から弾丸を落とすと発射される。本部付の歩兵砲小隊。あそこは、国境だから、一番先にやられたと思う。そうすると、その、牡丹江でロシア軍との戦闘で、その時、命を落としたら帰ってこられなかったはずだ。

武装解除とシベリア生活　1945 年 8 月 15 日に牡丹江を離れて、哈爾浜との中間くらいだったと思うが、8 月 16 日、そこで武装解除された。そこから、捕虜で、牡丹江に 1 か月くらいいた。牡丹江の糧秣廠(?)といって部隊の馬を置いたところへ。それからシベリアへ連れていかれた。

45年9月に行って、48年9月まで……。シベリアの、ソソヨッカ(黒竜江省牡丹江からウスリー江に至り、ソ満国境の地点。なお類似地名としてストノフカがあるが特定できない)に一番先に入った。それから、転々とそこらじゅうを連れていかれた。ロシア軍の直接の捕虜だったから、何時でも、自動小銃をもって、後を付けられていた。それから1人で歩くのにも自動小銃を持って後をつけてくる。収容所に入れられてから、まず、伐採労働が多かった。朝は、8時ころから晩の5時ころまでだった。それも、ノルマで。

大体2メートルの薪を切ってたから、それをノルマで2立方で、2メートルの長さの1メートルの、高さで、幅1メートル、これだけが1日のノルマ。1人のノルマがそれも共同で2～3人グループで、だから2人の場合は、4立方・3人の場合は6立方であった。

労働は、初めはきつかった。第一食べるものがないから、先ず春は、草の芽が出たら、食べられるものはみんな採ってきてスープの中に入れて、具をふやして、食べた。ロシア兵に自動小銃を突きつけられて歩くけれど、日本兵の中には、脱走をしようとした人もいる。2人で脱走をくわだてて、その収容所の正門に立っている歩哨を殺して、自動小銃を奪って、隣の収容所へ行って同じようにして1丁奪って街の近くへ出て、そこで、ロシア兵とやり合って、弾丸がなくなり、収容所に連れて来られた……、身体中穴だらけだったそうだ。収容所の門の前までトラックで来て、足で蹴りたおして、落として行ったということだった。それも、冬だった。

牡丹江での戦闘をやったときも、命を落とした人が多かった。

時計から万年筆……。それは、こうやって手を挙げて、1人が拳銃を突きつけて、1人1人身体中全部さぐる。それで、目ぼしいものは全部とられた。全部そうやって取るもので、時計などはロシア兵の両方のポケットにいっぱい入っていた。命令違反というか、ちょっとしたことでも、ロシアの兵隊は程度が低いので、第一自分の名前も書けないというような連中が多くいた。〔日本では学校へ何年くらい行ったか〕と聞くから8年くらい行ったというと、びっくりしていた。歯ブラシなど向こうにはないので、珍しがって、胸のポケットに並べて指して威張って街を歩いていたとも聞いたが……ちょっと話にならないぐらいだった。それでも相手は武器を持っているから、言うことを聞かなければならなかった。途中で捕虜になってからも、殺された人がかなりいた。今、思えば、よく帰って来れたということだ。

ノルマは、他の人に私の分までやってもらった。そうやってお互いに助け合ってきた。リンチというものは無かったが、酷いときは、真冬にローダンが回わらんといって、一晩中、山に置かれたときがあった。夜ですから、何にも出来ないので、ただ火を焚いて、あたっているだけ。だいたい一収容所が千人単位だから、私のグループは、50人くらいだったか、それで、所々に火を

焚いては固まっていた。それにロシアの歩哨も火を焚いてあたっているだけだった。真冬だから、雪もずっーと回りにあるが、火を焚くところだけ溶けて、あとはどんなに火を焚いても溶けない。衣料品なんかは、だいたい1着で、ロシアの兵隊が着たオオバー、それを支給された。それを帰国したとき家に持ってきた。

ところが、もっと、問題になるのは、戦争が終わってからで、死者が多いのは、シベリアであるが、抑留されて死んでいる。やはり、たいていアメーバー赤痢である。内地から満州に入って間もない人たちは、やはりそれだけの環境に慣れていないから、水と、シベリアへ入って、食べ物にもよるが。アメーバー赤痢は、下痢をして、ちょっとひどくなると1日に何十回と下痢状態になる。シベリアでは、赤痢を病気とは認められなかった。不注意として処置されるから、死んでも仕方ないということになる。下痢がひどい。岡崎の人が、亡くなったが、みんなで、埋葬したが、その人の身体中に、蛆虫がわいていた。

シベリア抑留生活からの帰国以後　藤川氏は、1948年に日本に帰って来た。それは、シベリアに抑留されて、収容所が、解放のなんらかの判断をして帰してくれたのか。どういうことであうか。ロシアの判断からか、ひとつの収容所全部一緒になって帰ってきた。そのひとつの収容所千人くらいの規模の帰国であった。ルートは、ナホトカから舞鶴に、山澄丸に乗船して、戻ってきた。

帰国してから、農業を始めた。何か手伝おうと思って、農業や山仕事などを手伝っていた。それから、途中で浜松の会社へ、勤めにいった。1964年ころからのこと。それから定年までだいたい、20年近く浜松の製紙会社だった。山仕事では、伐採とかいうその仕事で……。それは、山仕事をやっていて、その会社が山を買って、その会社の仕事をしていて、その関係できてくれといったので行った。

戦後はその土地は、あの5反歩だけ、持っていた土地、あの土地はそのままで維持していた。今では米は、「体験の里」に貸してある。お茶も今度できるダムの関係で、道を広くするということでその近くに家の茶畑が2反8畝ほどあったが、すり鉢みたいになっていたので、4メートルくらい下がっていたので、そこの切り割りを採った土で、県の方で埋めてくれるということで、お茶の樹をやめて埋めてもらった。そこは橋の上側で平らになったところ。今、思えば、よく帰って来れたということが実感だ。

7　周智郡森町のある青少年義勇軍体験者の場合（その2）

いままた一人、満蒙開拓青少年義勇軍の体験をもつW氏（本人の希望で特に氏名を秘す）の経験を1994年6月のヒアリングによって、見ておこう。おなじ満蒙開拓青少年義勇軍の体験といっても、相当に異なった内容を知ることができ、しかもそれによってさらに全体像を知る手がかりとなろう。W氏は1922年（大正11年）5月5日生まれで、学歴として天方村立問詰尋常高等小学校、1928年4月入学、1936年3月卒業、出身地は旧天方村大鳥居（現森町天宮）である。

満蒙開拓への志願動機　小学校高等科卒業後、しばらく家から製箱（茶箱・メロン箱の木箱造り）の工場で1936年から18歳（1939年頃）まで製箱工場の職工として働いたが、百姓も手伝ったりしていた。1939年8月22日、静岡県庁に集合して、いろいろな話があった。それから内原訓練所に出発し、そこで訓練を受けた。訓練期間は、39年8月22日から12月迄の4ヵ月間、訓練所で訓練を受けて、その12月に渡満した。先ず、伊勢神宮に一泊して、翌朝、新潟から朝鮮へ、清津へ一泊、羅津へ一泊、新京（長春）へ一泊、鉄嶺へ、駅から八km奥に入った所、鉄道より西へ……、開拓団は、鉄嶺大訓練所、第二大隊山本中隊の宿舎に夜になってから着いた。

大きな農場を求めて　満州に行くきっかけは……、それは、百姓が好きだったので。大鳥居のような狭い所で、しようがないと思っていた。百姓にどおせ行くなら、広い所へ行って、やって見たいと思って……、そのきっかけは、募集案内に第二次満蒙開拓青少年義勇軍の写真があったもので、よし、ここへ行こうと思って島田町（島田市）の面接所へ行ってきた。面接所で、どういう気持ちで志願したかって、色々聞かれたけれど……。百姓が好きで、大々的にやろうと、小さいときから思っていたので、そういうふうに話してきた。家は本当に、それこそお話にならない貧乏で、小作で、子どもながらに、収穫を沢山とっても、みんな持っていかれて、家で喰う物はいくらもない。長兄・姉・次兄・私・妹・弟、それぞれに3歳くらい離れて6人兄弟だった。今、思うと、親も、子どもを喰わせるのが大変だったろう。家族は別に何も言わなかった、一人でも口が減ったほうがよかったのではなかったか。何しろ貧乏な生活をしていたから……。家では、それは聞かなんだけれども、訓練所に入ってから、細かく聞かされたねえ。内原訓練所の加藤完治所長については、別に印象はない。みんな、満州へ行きたい、行きたいという人ばっかりだった。

開拓団への出発と屯墾病　「今は、お国を遙何百里……」とこの歌は新潟港を船で出るときに、国防婦人会と女学生が歌って送ってくれた。そうそう、宮城遙拝、あれは、やった。それで、天晴れな朝焼け彼方の地、オオケイ、イヤサカ……を唱えて大和体操(やまとばたらき)をやる。加藤完治が教育してくれたね。鉄嶺訓練所に、3年いた、3年たつと、永住地へ移るようになって、各中隊で永住地に移動した。慶山開拓団という所だった（山本治郎編『第二次慶山義勇隊開拓団史』1984年も参照)。慶安県だったので、その慶と、山本中隊の山をとって慶山と付けたのではないかと思う。永住地に行く前は、訓練所で農耕技術を教えられ、実際に農耕をして、それから、まあ、軍事教練が主になって、毎日、半日くらい教練をやっていた。教官は、九州の人だった。教官は、九州の人と東北の人が幹部だった。勉強もあった、団長さんが教員だったので……。勉強の中には、満語、向こうから先生が来て、週に1～2回教えられた。訓練所には、同じ年齢ぐらいの人達がいて、六小隊に分かれていて、一小隊は、学校を卒えて直ぐこちらへ来たぐらいの人達ではなかったか。年齢が若かった。16か17歳の人達だった。人数は、一小隊50人くらいだった、そして、宿舎で寝起きして軍事教練を受けて、農耕をやって、たまには、満語の教育を受けてという生活だった。みんな、先ず思ったことは、もっと立派な家ではないかと思っていたが、その家は、小屋みたいなもので、電気は何もない、ペーチカがその部屋に3つあって、土間の上に莫蓙を敷いて、布団もホンの煎餅布団。なんというか、この辺で寝袋っていうか、あんな式に出来ていて、薄いやつだった。冬はオンドルで、温かくてよかったが、そういう布団に入って寝た。一つの部屋に一小隊単位で入っていたね。だいたい50人くらいはいっていた。不寝番があって、1時間ずつ交替で、寝ている順に、ズーとやった。不寝番は、冬は寒いからペーチカの火を絶やさないようにやった。向こうに着いて直ぐ郷愁が始まって、そんな時、寮母が鉄嶺訓練所の本部に居て、各中隊を巡回して色々寝ている人のところへ行って、慰めてくれた。何しろ寝込んでしまう。仮病を使って。ちょうど登校拒否みたいになって、起きてこなくて、そんな時は、話をして、慰めてくれる。寮母は学校の先生みたいだった。慰められては、気を取り直して働いた。12月に満州へ行って、寒さには、びっくりしちゃった。想像よりはるかに寒かった。300人くらい行っていたが、約半数以上、いや、3分の2位の人が屯墾病（開拓病）に罹った。内地が恋しくて、なにしろ帰りたくて、帰りたくてしようがなかったようだった。

満州の住環境と農業生活　土塀で囲ってあって、その中に家が出来ている。向こうには、そういう所が多い。土塀には、銃眼というか、それがいろいろ造ってある。その土塀の中に展望所があり、そこへ交替で上がってズーと見張りをやっていた。一時間くらいの交替で。望遠鏡は持た

ずに、銃と肉眼だけ。住居はトタン葺……。壁の辺は土です。土で、一㍍くらいの厚みがあり、ダーと家の周りを囲ってあって……。わたしが行ったときは、まだ、土地を割り振らないで、協同でどんどん作物を作った。大豆・コウリャン・ジャガイモ・大根・カボチャ・西瓜・粟・稗黍等を作っていたが、サツマイモはできなかった。土塀は、家の回りだけで畑は塀の外にあって、土塀の外に出て畑仕事をした。出来具合はわるくはなかった、土地は良く肥えていた。満人（実はほとんど漢族）をとっつかまえてきてはいじめた。開拓地に満人が出入りすることはあまりなかったが、開拓地の近くに大きな満人部落があった。そういう部落の人達とは仲良くしなくてはならなかった。物をくれたり、貰ったりしては、つき合った。協同耕作したものは、大勢だから、何百人といたから、自分らだけで食べていたのではないか、たぶん、そうだと思う。コウリャンとタイ米を混ぜ合わせてたべていた。当時は南京米って呼んでいた。実際はどこから米がきたかわからないが、稗・粟・黍をたべていた、ひどい物だった。

満蒙開拓と本国農家の貧困　効果の面はどうであったろうか？　寒いところへ行ったのでちょっと考えたが、帰ろうとは思わなかった、日本の小作が大変だったし、それがこりているので。家に帰りたいとは思わなかった……、帰っても、又、小作の思いをしなきゃならないので……。開拓青少年義勇軍への応募は何か募集の紙を見て行ったのかどうか、それが、どうだったかは覚えていないが、先生方が熱心に応募するように働きかけたのは、それは、「大東亜戦争」からじゃないか？〔1943年～44年頃から小学校高学年と高等科で宣伝されたので、森町新町でも次男の人達が軍属に参加している。一人は無事に帰還したが、もう一人は終戦の時に亡くなったと聞かされている。〕自分は、第2次募集でいった。昔の小作は大変だった、子どもながらにわかっていた。今年は、多くとれたなあと思っても、小作料としてみんな持っていかれちゃうので、私らの家では2～3反だったので、8人の家族が食べていきようがない……。小作ではとうてい飯は食えない、お米を買う。一年中食べるなんて、とてもとても、だから、お米を買わなくてはならなかった。兄弟は全部で6人。長兄は、トラックの運転手、次兄は、トラックの助手、姉は、紡績か何処かへ勤めて帰ってきた、妹も弟も学校だった。一家が食べるのは大変だった。今思うとそうだ。

青少年義勇軍の生活　冬は、薪がなくて、訓練所の本部へ満人が毎日馬車に薪を積んで持ってきたので、私らは、八kmくらいの道のりを毎日とりにいった。1人3本くらい背負って訓練所まで持ってきた。えらかった。雪がいっぱい積もっている。ほとんど馬耕だった。広い土地を耕すのは、大勢だったので、〔みんなで、わあわあいって〕やるもんで、さほど苦にならなかった。

馬が、一頭や二頭じゃあないし……。私の中隊は、静岡県で12〜13人行った。〔内原訓練所の宿舎前の小隊の集合写真を見て〕気候は違うし屯墾病に罹ること、そんなことは思わなかった。自殺未遂も、なかなかあったようである。開拓団には、農事の先生から学科の先生からいた。団はこれぱかりは、昔ながらの軍隊式で、小隊長があって、副小隊長・一班・二班……とかがあって、軍隊式で班長・副班長があった。私は、副班長をやっておった。リーダーなどは、小隊長が決め、中隊からきた。上からの命令で決める。どういうわけだったか、内原訓練所にいるときに決められた。私は、一班の副班長をやっていた。小隊には六班あったか？6〜7人だった……？私のいた年数が少なく、慶山から移動してから、寒さが身にこたえて、辛かった。安達(アンダー)がちかくだが、そこには捕虜を集めた収容所があったはずと言うことは知らない。〔安達には七三一部隊の生体実験のため、補虜が収容されていた〕。

演劇をやった、一周年記念だった。演劇発表会。チャンバラをやったり……。寂しさを紛らすためにいろいろやった。運動会から銃剣術大会。私が満州に渡ったころというのは、全国各地から集まってくるのは、そんなに強制されたのではなくて行きたいとか、行ってみようとかいったグループが多かったようだった。

部屋では、串刺しのドジョウみたいにねていた。洗濯は、みんな自分自分でやった、シラミがわく。そこで、沸騰させた湯のなかへ洗濯物をつける。そうしなければ、普通に洗濯しただけでは一晩たつと、パンツなどにのたっていることになる。

慶山開拓団の場所に行った人たちが、言っていたけれど、鉄驪訓練所は全然わからなくなっているらしい。今はもう、殆んど家が建って、アパートみたいになっている。

満蒙開拓団から戦争動員へ　Wが1939年に行って、43年に徴兵検査、44年1月14日か15日に現地入隊、哈爾浜の部隊（関東軍独立守備隊）で兵隊としては、満州に1年くらいいて、中国（北支）へ44年1月頃に行った。戦闘状態は、八路軍との戦争だった。Wは、お陰様で怪我はしなかった。部隊は歩兵だった。黄河のほとりで終戦だった。その後天津の収容所に1年くらいいて、48年頃帰国した。収容所では、日本軍の分捕り品の整理をした。中国では教育は受けなかった。収容所では、兵隊から居留民から、ごちゃごちゃだった。山口県の仙崎港に上陸した。開拓団で1年半くらいで入隊した。もっと早い人は、訓練所には入って直ぐ入営した人もいたので、Wらも、開拓団にはそれほど長くはいなかった。Wは、北支にいたのでよかった。兵役を逃れた人々が、最後まで寧安開拓団で働いていた。その人達は、内地から嫁をもらって行った。兵役を逃れた人々は、体格不足とか障害者みたいな人々がいたので、その人が最後までいて満州から引

き揚げる途中で、病気になったり栄養失調とかでほとんど死んじゃっている。このようにして、人によっては帰る途中で、奥さんや子どもさんをみんな亡くしてしまっている。

むすび

以上、筆者は満蒙開拓団の組織化の契機となった経済更生運動の概要と、静岡県における動向を、辿った後に、満蒙開拓への民衆動員の形態を静岡県榛原郡中川根村（中川根町）の場合と、磐田郡福田町の場合のそれぞれを捉えてみた。そしてさらに満蒙開拓の現場とはどういう状況にあるのかを、現地に探って概述し、あらためて開拓団村の「優良地」であることの意味を問うことになった。

つまり開拓団はその字義通りのあたかも「処女地」の開墾であったかのように認識してはならないこと、まさに拓務省の残された資料の語るように、開拓団村は現地農民の既耕地を「買収」したか、占拠した地域を中心に形成されていたであろうことを、再確認した。この点は、中川根町の満州拓殖公社に勤務した高木悦郎氏によっても、また森町の証言者の指摘によっても、明確であろう。

そして、周智郡森町の２人の体験者のヒアリングによって、動員された青少年義勇軍の隊員たちは多かれ少なかれ、当時の貧困な農村、その中でもとりわけて零細小作農民の次三男といった階層の人々であり、しかも貧困なるがゆえに、「満州」に行くことで、家の貧困の多少ともの軽減を図りたいとするおもいと、かりに出掛けた「満州」の土地での暮らしがどのように苦境に陥ったとしても、また「屯墾病」という名のノスタルジア、ノイローゼに罹ろうとも、母国に帰っても待ち受けている苦難を考えれば、帰国する希望をもつことはできなかったという深刻な状況が明るみに照らし出されたのではないかと考える。

まさにそこにこそ軍部をはじめとした国家の推進する「満蒙開拓団」組織化の意味が提示されているように考えられよう。

以上、さまざまな角度から照らしてみて、満蒙開拓団は、①既耕地の耕作に従事した事実、②渡航者は多くは農家の貧困層または小作農民のよう位置にある者、③他方では福田開拓団のように戦時経済の進展の中で、従来の平時の下での繊維産業等に従事していた生産者、商業家の転廃業組、④開拓団の人々の中には少なからず精神的な異常を来した者が存在したことなどを見ることができよう。今回の考察を進めた中で、一つの成果と言えば、参加者の口から、前述の①に照応した事実を自ら解明されたことであろうし、そのためには満州拓殖公社が活躍した事実を元職

員であった人から伝えていただけたことであろう。

すでに述べておいたことであるが、満蒙開拓団に関しては、ほとんどの体験者の中から口をついて出るのは、当然の事ながら現地住民の「襲撃」とソ連軍の略奪的狂暴である。しかしそれは「悲劇」の大きさを過小評価してはならないと同時に、そもそも「侵略」によって生じた根本問題を見過ごす誤りに通じるのである。

〔付記〕　小稿は近日に公刊される（97 年 12 月刊行された）『静岡県史近現代通史編二』に掲載の論稿を基礎としつつ、それを理解する上で有益と考える資料、ヒアリング調査報告を付け加えて、改めて作成したものである。また本稿の基本的内容は静岡県磐田郡福田町教育委員会の 1997 年 11 月 20 日町史講演会「満蒙開拓に動員された人々」に示した。またそれらは 1996 年 10 月 8 日の中川根町史講演会でも述べたが、ともに体験者の多数の参加のもとで話すことになった点で、緊張する面はなかったわけではないが、何れの場合も参加者の感想の中に、筆者が述べたような背景があったとは知らなかったという点があった。筆者は恐らくそうであったろうと認識している。

動員された人々はひたすら「イエ」のことを考え、主観的には現地の中国人への抑圧者として自己が位置づけられたという認識は不可能だったことであろうと思うからである。森町地域のヒアリング資料は 1994 年 6 月に行った森町史編集上の資料取材の一環であり、ヒアリングに応じて下さった藤川誠一、Wの両氏、この記録には安間善一氏のご協力を得たこと、また中川根町のヒアリングでは取材に応じて下さった高木悦郎氏、福田開拓団の現地視察では寺田ふさ子さんに、それぞれたいへんなご尽力を得たことを、重ねて御礼申し上げさせていただきたい。

(1997.11.29.稿)

参考文献（主要なもの）

〔1〕　武田勉・楠本雅弘編『農山漁村経済更生運動史資料集成』Ⅶ，柏書房，1985 年

〔2〕　満州移民史研究会『日本帝国主義下の満州移民』龍渓書舎，1976 年

〔3〕　オイゲン・ヴァルガ『世界経済恐慌史』慶応通信，1935 年

〔4〕　深井英五『通貨問題としての金解禁』日本評論社，1928 年

〔5〕　同　『金離脱後の通貨金融政策』日本評論社，1933 年

〔6〕　山本義彦編集・解説『第一次世界大戦後　経済社会政策資料集』全七巻，柏書房，1987年

〔7〕 橋本寿朗『大恐慌期の日本資本主義』東京大学出版会，1984年
〔8〕 山本義彦『戦間期日本資本主義と経済政策』柏書房，1989年
〔9〕 中村政則『昭和の歴史　第2巻　昭和の恐慌』小学館，1982年
〔10〕 猪俣津南雄『窮乏の農村』中央公論社，1932年（岩波文庫再録）
〔11〕 井上晴丸『日本資本主義の発展と農業及び農政』中央公論社，1956年
〔12〕 暉峻衆三『日本農業問題の展開過程』上・下，東京大学出版会，1970，1984年
〔13〕 『御殿場市史』第七巻近代史料編III（1980年），同第九巻通史編下（1983年）
〔14〕 『菊川町史』近現代通史編（1990年，山本義彦執筆部分）
〔15〕 『掛川市史』下巻近現代通史編（1992年）
〔16〕 枝村三郎「静岡県における満蒙開拓青少年義勇軍」（『静岡県近代史研究』第14号）
〔17〕 小屋正文・小林大治郎・土居和枝『明日までつづく物語』平和文化，1993年
〔18〕 松下麟一『土と人―ある農協運動者の生涯』1995年6月
〔19〕 静岡県民生部援護課『静岡県送出元満州開拓民の概要』1995年11月
〔20〕 中村雪子『麻山事件』草思社，1983年
〔21〕 小川津由子『祖国よ！中国残留婦人の半世紀』岩波書店，1995年
〔22〕 杉山春『満州女塾』新潮社，1996年
〔23〕 山川暁『満州に消えた分村―秩父・中川村開拓団顚末記―』草思社，1995年
〔24〕 山本義彦「経済更生運動と『満州移民』」『静岡県史研究』2号，1985年
〔25〕 矢崎秀一編・元満州国第十次達山開拓団／元竜江省立竜山開拓女塾『春光』，1976年
〔26〕 長谷川要一『満州に夕日落ちて―満州移民そして静岡県送出四開拓団の終焉』1985年
〔27〕 寺田ふさ子『無告の大地』潮出版，1996年
〔28〕 静岡県拓魂碑建立委員会『あゝ満州―静岡県拓魂碑建立に寄せて』1975年
〔29〕 岩田晶『波蘭の南十字星　山崎剱二の一生』三一書房，1994年
〔30〕 静岡県海外移住協会『静岡県海外移住史』1970年
〔31〕 あゝ清渓編集委員会『あゝ清渓―ある開拓少年義勇軍の記録』1968年
〔32〕 高橋泰隆『昭和前期の農村と満州移民』吉川弘文館，1997年
〔33〕 山本治郎編『第二次慶山義勇隊開拓団史（満州青年義勇隊鉄驪訓練所山本中隊）』1984年